
忍びの忍ぶ道

小牧洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍びの忍ぶ道

【Nコード】

N1563Q

【作者名】

小牧洋

【あらすじ】

凜は学校の帰り道、小さな少女の危機を己の力で救った。その力は第三者に見られてはならないのだが、しかし偶然通りかかったクラスメイトの美冬に見られてしまう。第三者に見られたことが雅柴家当主である祖父に露見し、罰として『異門の壺』の中へ。

はたしてその中の罰とは……。

主人公は最強かどうかで言えばそうでもないですが、それなりに強いです。ただ、今後も強くなっていく予定もあり、チートもないので、最強モノとはちょっと違うかもしれません。

001 序章（前書き）

本作初投稿、処女作です。

誤字脱字や日本語ミス、もしくはすでに類似作品があればご指摘いただけると幸いです。

あと二、三話あたりまで読まない異世界に行きませんので、ご了承ください。

特に何かを考えるわけでもなく、ボーツと頭の中を真っ白にして、いつも見慣れた風景を見ながらゆつくりと歩くのは凧の昔からの習慣だ。誰かと一緒に帰るわけでもなく、どこかへ寄り道するのでもなく、放課後になったらのんびり放浪するように帰る。

いろいろな店やビルのある大通りを歩き、隙間なく道を占領している車を眺めてみたり、河川敷を歩き、少年たちが汗水流して野球の練習をしている姿を眺めてみたり、住宅街を歩き、様々な家の形を眺めてみたり。そこにこれといった思いは込められていない。ただ、歩いて眺めるだけ。

こんなことをするようになったのは小さいころからだ。

まだ小学校に上がるという頃に父親の実家を初めて訪れた。

その時に祖父からこんなことを言われたのだ。

「自分を無にしないさ」

ただそれだけだった。昔のことすぎてどういった経緯でこの言葉が出てきたのかわからないが、しかしそれでもこの言葉だけは小さいころの凧の心に強く響いた。

無にしたらどうなるのかも、無にした後はどうすればいいのかも、何一つ教えてくれなかった。

しかし、凧はこの意味こそ分らなかったものの、自分なりの解釈をし、ただ何となく無にするということを『した』。

凧はその祖父が好きだったから、小さいころの凧はそれを真に受ける。

祖父の言っていることはなんでも正しいものだとしきりにそう理解していたから。なぜ理解したのかは、祖父に怒られる父の姿をよく眺めていたからなのかもしれない。

だからその日から毎日無心になる時間を設けた。

やり方なんてわからなかったが、とにかく無にしている間は何も考えないようにした。

小学校に上がったころは、やはり学校という場所である以上周りの交流があり、比較的周りと同じような普通の生活をしたがったが、しかしそれでも一日のうちに一回は無心になる時間を必ず設け、そしてそれを忘れたことはなかった。

友達と一緒に帰って、ゲームをしたりサッカーをしたりと普通の生活を送り、家に帰ってから無心になる。やり方は様々で、風呂に入り、浴槽に使っているときに目をつむって黙想してみたり、寝る前に黙想してそのまま眠りについたり。

今のような下校中に無心になるというやり方をするようになったのは中学生になってからだ。

ただ、これに何の意味があつたのかは毎日毎日やってみても結局わからなかった。

なんだかんだ、惰性で続けて六年。

そしてその六年目のある日を境に、あの時祖父の言った「自分を無にする」という意味を大きく知ることとなる。そして凜は「無心になるなんて言うばかげたことなどしなければよかった」といままさにひどく後悔した。いまさらながらに。

一度その道に踏み入れた以上は二度と元の道に戻ることはできない。なぜならそれがその道の決まりであり、決まりを破ることは絶対にできないから。

凜は体の赴くままにその足を進めた。

周りは新築の一軒家から、古びたぼろアパートまで様々な建造物で囲まれている。どうやら凜の無意識は住宅街を選択したようだった。

凜は特に自分の帰る道を決めない。ただ体の示す方向に歩くだけだ。

だからたまに家とは全く違う方向へ進んでいることもあるのだが、

それでも無にするようにしている以上、そういう現実だと受け入れているし、それ以前に無心になっっているのではどうでもいい道を歩いていることにまず気が付かない。今日の場合は帰路の途中にある住宅街の道の一つで、間違った方向にも進んでいないので、おそらくこのままいけば無事家へと到着するだろう。

住宅街と隣接するようにある比較的車通りの激しい道へと歩いた。その道は目の前にあり、それを超えて十分も歩けば凧の家はある。

凧の今歩いている道の両サイドは田んぼがあり、車通りの激しい道は何にも邪魔されずに横に伸びるように見える。ちょうど今の時間は車も少なく、たまに車が横へと通り過ぎるのが見えるだけだ。

しかし、その日はいつもと違う光景があった。その一瞬の光景は自然だが、状況で見れば不自然な光景。

車通りの激しい通りの左方から、大型トラックが走ってきた。速度は制限速度をきっちり守っているし、それだけならいつもの通りのなんの変哲もない光景だろう。

ただ、凧の歩いている道の前方に少女の姿があったのだ。幼稚園児と思しきその少女は、交差点を挟んで凧と向い合せにいるだけで、この光景までだったらやはり普通の範疇に収まるだろう。

が、しかしその少女の行動は普通とは違った。

いや、一見普通にみえるかもしれない。だが視野を広げればそこには大きな危険。

少女はトテトテと小走りで交差点へと向かっていたのだ。その目先には赤色をしたゴムボールがコロコロと交差点へと転がっていた。少女は確実にトラックの存在は認知していない。

凧はその光景に焦りを覚えた。このままいけば間違いなくトラックが、ボールを追いかけて交差点に入り込んできた少女を引くこととなる。それはトラックの速度と少女の走る速度を見ればわかることだ。

凧の無心だった心は一気に現実へと引き戻された。

慌てて交差点へと走り出す。距離にして百メートルはあるだろう。

男子高校生であれば、早くて十一秒台で遅くても十六秒台ぐらいで走れる距離だ。が、あと五秒も立てば少女は空中に大きく吹き飛ばされることになる。

その光景が脳裏にはつきりと浮かんだ。大きく跳ね飛ばされ、血は止め処なく流れる。原型はかるうじでとどめているが、その姿は先ほどまでの無邪気なかわいらしい姿とは大きくかけ離れる。ひどく不快で恐ろしい光景だった。

その惨事が繰り広げられるまで残り四秒。

たとえ百メートルの世界記録保持者だったとしても間に合わない。凜は迷った。

どうすればいいのか、で迷ったのではない。

どうやって人に見られないで少女を助けられるだろうか。凜はそう迷った。

凜のある力であれば間違いなく助けることはできる。だが、それを当事者以外の第3者に見られることがあつてはならない。これは力を行使する上では絶対の決まりだ。これを犯せばその力について記した書物に書かれている内容をもとに罰を執行されることとなる。

それは死ではない。しかしそれに準ずるなにかであることは凜も父親づてに聞いて理解していた。

自分だって死にたくはない。だけど、目の前で人が死ぬなんて光景は見たくはない。またしても脳裏に少女が吹き飛ば姿が浮かんだ。凜の中で迷ったのは数瞬、即座に決断がなされた。——そんなこと構ってられるか！

凜は立ち止まり、自分の中に流れる気を足の経絡に集中させる。そして増幅へ。

必要なまで溜まった気は通常の人間ではありえない爆発的なエネルギーを生む。そしてそれは形にとらわれず、性質を持つ。

今回の凜の気の性質は『動』。

凜は一気に地を蹴った。ボコリとアスファルトががゆがむ鈍い音

がしたが、それは凜のもとへと届かない。神経はすべて足へと向かっており、ほかに向ける神経はないからだ。

とにかく駆ける。風で息もできない。それでも駆ける。

百メートル弱という距離を三秒足らずで詰めた凜は、ちょうどトラックと少女がぶつかりかける瞬間に交差点へと出た。

左からはあわててハンドルを左へ切っているトラック。

前方には未だにトラックの存在を認識せずにボールを追いかける少女。

ぶつかるには1秒もいらない。

凜は少女をお姫様抱っこのようにして抱え、慣性を殺さずに利用してまた大地を蹴って脱出。高く、そして華麗に飛ぶ。

トラックは甲高いブレーキ音を鳴らしてる。飛び上がった凜は、空中で後ろをちらりと見てトラックの存在を確認してみたが、どうやらハンドルを切った拍子にスピンして転倒する、という惨事は免れたようで、なんとかかしつかりタイヤを地面へとつけていた。それをみて安心した凜は、気を腰、股関節、膝、足首といった下半身へと集中させ、衝撃の着地を和らげながら着地した。

お姫様抱っこをされていた少女は目を点にしながら、凜の顔を見ていたが、ゆつくりとおろされたと同時に我に返ったようで、その大きな目をぱちくりとさせた。

「あゝ、大丈夫？」

元々こういった小さい子を相手にするのは性に合わないのだが、できるだけ凜は声色をやさしくして声をかけた。

「だいじょーぶだよ！」

「そっか。でも危ないから道路で遊んじゃダメだよ？」

「うん、ごめんなさい。……でも、おにーちゃんすごいね！ スーパーマンみたいだった！」

目を輝かせて少女は言った。その目からはみじんも邪気を感じられない。まるで無邪気だった。

「アハハ……おにーちゃんはスーパーマンなんだよ。だけど、みんな

な誰にもいつちゃだめだよ？」

そんな無垢な少女に凜は嘘をついた。嘘と呼ぶにはかわいらしいものだが、しかし小さき子にはその嘘が見分けられない。冗談という言葉でも片づけられる嘘。

それ以外にこの場を切り抜ける方法はないと思ったからこうしたわけだが、凜はどうしようもない罪悪感に見舞われた。——たかが小さなウソだろ！

凜は自分に言い聞かせる。

「なんでえ？」

「スーパーマンはみんなの陰で守る存在だからだよ」

「んゝそうなんだあ。よくわかんないけど絶対言わない！」

自分でも少々苦しい言い訳だと思ったが、そこはやはり子供。割とあっさり信じてくれた。

そして信じてくれたことにまた罪悪感を抱く。

「じゃあ約束」

凜は小指を差し出した。その行動の意味を察した少女も同じように小指を差し出す。それを絡ませて、お約束に歌を二人で歌う。

指切りげんまん嘘ついたら針千本のーます。指切った。

『指切った』を言ったと同時に二人で指を離した。

「じゃあね。おにーちゃん急いでるから」

「バイバイ！」

そういつて凜は立ち上がりざまに少女へと手を振って前へと歩きだした。足取りは重い。

当事者である少女とトラック運転手に見られた。自分の力を。

一応、少女とトラック運転手以外の第三者には見られなかったとは思うが、結局自分はその程度でしかなかったということだ。

おそらく今の状況、凜の祖父や父親であつたら周りに何の痕跡も残さず、そして誰にも気が付かれずに事を済ますことができただろう。もしくは最悪、あの少女を見捨てる選択肢を選んでもおかしくない。

凜の性格上見捨てるという選択肢は頭の中にはなかっただろうが、それならばそれに見合うだけの力を持つていなければならない。凜はまだその道ではまだ未熟。

この場合正しい答えというのは存在しないが、あえて正解を決めるとすれば、普通の人間であれば助けることが正解になるのだろうが、雅柴家でこの答えは誤り。

正解は「能力に見合った行動をする」といったところだろう。結局雅柴の家は自らの力を公にすることを最も恐れているのだ。

少女のほうは、たとえ親に凜の存在を暴露したところで、親のほうは子供の見た夢程度に片づけるだろうから力の露見にはつながらないだろう。

トラック運転手に関しても、『轢かずに済んだ現象』という謎に見えているだろう。わざわざ誰かに言うこともないだろうし、仮に口が軽くて誰かに言ったとしても、「人が秒速40〜50メートルで走った」という言葉を誰が信じるのかという話だ。

ただ、やはり見られたという失態は大きい。

凜は無心になることも忘れて、ぐちぐちと悩んだ。

考えれば考えるほど足取りは重くなっていく。

その重い足取りで歩いて十分、ようやく自宅へとたどり着いた。

住宅街からは少し外れたところにあり、ぎりぎりで住宅街と同じ地区とされている。

見た目は先ほど通ってきた住宅街にあるような一軒屋とさして変わらな

い。凜はポケットに入れてあった力ギを使って玄関へと入った。

「ただいまー」

けだるげではあるが、一応これは言うことが習慣となっている。しかしというか、やはり反応はない。誰もまだ帰ってきていないのだ。

とくに誰かに『お帰り』を言って欲しいわけではないのだが、やはり反応が何もないというのはなにか物足りない感が否めない。

だがそれ以上何かを考えたところでどうにかなるわけではないので、凜はゆっくり階段を上って自室へと入った。

美冬の目撃

美冬は帰路を急いでいた。普段は放課後を友人と遊ぶことを使うような、十分に一般女子高生のくくりに入るような少女だ。

だから美冬が急いで帰っていることは比較的珍しい。

しかしその理由は至極簡単で、『通販で買ったバッグが今日届く』という、これまた女子高生らしい理由だ。足取りは軽く、今にもスキップしそうな浮き足の立ち方をしており、今日も学校が終わるのを今か今かと待っていたぐらいだ。

（今日……ついに、ついに届くんじゃあ………）

そのバッグには一目ぼれだった。

店内のガラス越しに見たそれは、別段ブランド物に興味のなかった美冬にはひどく衝撃的なものだ。

これほどまでに美冬がものを欲しがったのは、中学の時に熱狂してハマったバンドのライブチケット以来、久しぶりである。

クロエの白いパディントンバッグ。二十万円と高校生にはかなり痛い出費であるのだが、このために毎日アルバイトをして、その二十万円をようやく貯めることができたのだ。

だからそのことで今日の授業内容はなにも頭に入らなかった。もとも頭は悪くはないのだが、特別できるわけでもない美冬にとって一日授業が遅れることは少々苦しいものがある。

しかし、それでも手に入れたいものであるのは間違いない。

美冬は走る。疲れを知らずに一気に走る。

ようやく家の近くの住宅街までたどり着いた。別にそこまで急がずとも、そのバッグの配達は今後六時であり現在時刻は午後四時半なので、普通に歩いても時間には十分すぎるほど余裕がある。

しかし欲しいものがあるかどうかにも我慢ができないのは美冬の悪

い癖で、彼女自身もそれを自覚していた。

「ん？ あれは雅柴君？」

おもわず声が出ていたが、特に誰もいないことを確認すると少し安心する。

目の前には雅柴凜がいた。凜のクラスでの立ち位置は『すべてが普通以上だが、すべて特筆した部分のないどこにでもいる少年』

クラスに一人はいそうな人間である。特に仲の良い人はいなかったが、別に嫌われるようなこともなかった。そして特に目立つような人でもなかったと美冬は記憶していた。

対する美冬は容姿もよく、頭も悪くはなく、そして運動も割とできるといって何をとっても平均を下回らない。完ぺきではないが、間違はなく「できる女」である。男女問わず人気がある少女だ。性格もみんなに受け入れられるような、やさしすぎず、厳しすぎずというもの。

人間関係において余裕の立ち位置を獲得している美冬は、この機会に凜とも仲良くなっておくのも悪くない、と特に他意はなくそう思い、凜の方へと駆けた。バッグは後でいいかと、案外簡単に割り切れた。元々時間もあるのだから。

凜の歩くペースは割とふつうだったせいか、そう追いつくのに時間はかからなかった。そして美冬が声をかけようとした時だった。急に凜が走り出したのだ。

（は？ ちょちょちょ、なんで！？ ハッ！もしかして私の気を感知取って逃げたとか？）

わけのわからない中二テイストな予想をした美冬は、なぜか闘争心が沸き起こり、そのあとを追いかけたくなった。追いかけてやったのだがしかし、いまさらながらに凜が全速力で走っていることに気が付く。

つまり、別に突出した足の速さを持っているわけではない美冬に、男子の足には追いつけないというわけだ。その上美冬は知らないが、凜は普通の人間ではない。

絶対に追いつけないと思ったが、しかしその事実が余計に美冬の闘争心を燃やした。

あんにやろゝ、と美冬が全力で走ろうとしたその時、凜は急に立ち止まる。

（あり？ 止まったってことは別に逃げたわけじゃあないってこと？）

事実気が付いた美冬は、今度こそ声をかけようとした。が、次の瞬間美冬はありえないものを見た。

ボゴツ。アスファルトがえぐれ、そのはるか前方には凜の姿。

一瞬で、一瞬でだ。何十メートルもの距離を走った。

その事実は凜が人間でないことを意味する。どういふことかわけのわからない美冬には、驚くどころの話ではない。

人間には出しえない速度で走った凜は三秒と掛からず交差点へと飛び出した。

（ゲッ！ ひかれる！）

その時初めてトラックの存在を確認した美冬には、自殺行為に見えた。

初めてみる事故の瞬間に、恐怖よりも野次馬的好奇心が大きく勝った美冬はその瞬間を見た。

トラックは通過したはずなのに、ぶつかった音がない。そしてその直後、トラックが通過したその空中には四、五歳と思いき少女を抱えた凜の姿。

（うおッ！ 空飛んでるよ！ どうなってるの？ 映画の撮影とか？）

自分でも何を言っているのか、美冬はその姿にくぎ付けとなった。しかし、直後には混乱。

どうやって百メートルはある距離を数秒で進んだのか。

どうやって空高く飛び上がったのか。

人としての能力を大幅に超える事実に、美冬の踏み込んでいい事ではないのかもしれない。

本当なら、バッグを通販で受け取るために早く学校を出てきたのだが、いつしかそんなことは頭の片隅に片づけられていた。

（どういうこと？ あのMr. がつけられてもおかしくないぐらいに普通の雅柴君が実はスーパーマンだったとか？ これは、これは確かめるしかない！）

凜はどうやら助けた少女と話しているらしく、その場に立ち止まっている。今ならまだ追いつけると考えた美冬は、急いでそこへと駆けた。

が、ちょうど交差点を挟んで反対側までたどり着いたとき、凜は少女に手を振って、ゆっくりと歩き出してしまった。

また、あと一歩で追いつけない。そのことが美冬を腹立たせる。しかもちょうど美冬が交差点に来たあたりから、少女を轢きかけたトラックは走り出し、それに呼応するように車の数が増え始めてしまった。そしてさらに、信号がこの交差点にはないため、親切な車が止まるのを待つか、うまく車が途切れるのを待たなければいけない。

（あゝ、早くしないと雅柴君見えなくなっちゃう）

美冬は地団太を踏む。

うら若き女子高生が地団太を踏むという光景は、周りから見ればシニールで恥ずかしいものなのだが、それを気にしていられるほど今の美冬に余裕はない。

そしてようやく車が途切れたその瞬間、美冬は陸上選手バリの速さで走り始めた。

002 バレたら最期

凜は自室へ入ると、すぐに肩にかけたバッグをおろし、その中に入っている筆箱とプリントを取り出した。今日は数学の授業で課題が出されており、その提出日は明後日の数学の時間となっている。

目の前の問題はできるだけ早く片付けてしまわないと、後にだらだらと引いてしまう悪しき癖がある凜は、できるだけその日に片づけるように心がけていた。家に帰るとやる気が萎えるからと言って課題を出された日の放課後に図書室で片づけてから帰る日もままある。

さっそく取り掛かろうと机で構えたその時、家全体にある音が鳴り響いた。

凜個人には特に用事あるときでもない限り不快なインターホンの音。

課題もあつたので居留守を使おうかとも真剣に考えたが、課題は来客の対応をしてからでも遅くはないと自分に言い聞かせ、けだるげに席を立つ。

どうせ保険屋や訪問販売の類だろうと思って玄関扉を開けてみると、そこには意外な顔が見受けられた。

「こんにちは」

開口一番に快活な挨拶をして顔を見せたのは、同じくクラスの風木美冬さき みふゆだった。——もちろん美冬がああの瞬間を見ていたのを凜は知らない。

「風木……さん？ 何か用？」

凜はできるだけ心の棘を隠していった。

本心では早く出て行ってほしい。早くしなければ課題をやる気が萎える。

「ん？ 用がないとクラスメイトは遊びに来ちゃダメなの？」

「ダメってわけじゃないけど……」

顔がいいだけに、困った顔が似合うのがまた困る。

美冬はこう言っているが、実際には何か明確な理由を持って来ていると凜は予想していた。しかし、凜には美冬が家を訪ねる理由がわからなかった。

特に仲がいいわけでもないし、確かに同じ地区ではあるが、凜は高校に上がるのと同時に引越してきたから高校以前の接点もない。せいぜいクラスで事務的な何かを話す程度の間柄なのだ。それなのに家を訪ねてくれば、多少は懐疑的になるのも仕方がない。

裏があるが、それが読めもしないのに断ることもできない。

内心は渋々に入室を許可した。

「じゃ、おじゃまします」

そういつて、美冬は勝手に玄関をくぐった。お邪魔された凜は、しぶしぶリビングへと通す。

家に誰もいないからと言って、いきなり自分の部屋に招き入れるほどデリカシーがわけではない。むしろ家に誰もいないからリビングという空間をつかえたのだが。

十二畳の空間にはL字で黒い革張りのソファーにガラステーブル、四十型の液晶テレビなど、おしゃれというには飾り気はないが、シックな感じに整えられた家具が並べられている。どれもこれのが凜の父親の趣向だ。

適当に座つてと促すと、凜はオープンキッチンへと入り、その棚に入っているティーセットを取り出した。

「風木さんってコーヒー派？　紅茶派？」

「あ、じゃあ紅茶で」

「味のリクエストは？」

「ストレートでいいよ」

相手に気を使わせない程度に自分の意見を言い、我を通さない程度に自分の意を伝える二人。どちらも周りの空気を読んで生活してきただけあって、そういつた類の会話は得意だった。特に女の場合、

日常生活の会話ですら気を遣い、したくもないリアクションを要求されることもある。

ティーパックで紅茶をすぐに出し、市販のクッキーを添えてリビングへと持って行った。

凧の家にはこれまた父親が趣味で集めている数々の紅茶の茶葉があるのだが、ここでティーパックにしたのは相手を「高いものを飲むのは気が引ける」と気兼ねさせないようにと凧の意思だ。

「……」

「……」

二人の間を無言がつつむ。音が鳴るのは紅茶のカップがテーブルに置かれるときだけ。

先に話を切り出したのは、

「風木さんと事務内容以外で話すのって初めてだね」

凧だった。声はいつもと変わらない、抑揚のない安定がある。家に入られた時点で、長引くのか覚悟し、同時に早く追い出すのもまたあきらめたからだ。

「そうだね。雅柴君ってあんまり表出て話す人じゃないみたいだし」
対して美冬は何かを切り出そうとしている分だけ声が浮ついていた。

「うん、まあ」

「……」

「……」

相変わらずの無言属性。

「あ、あのさ」

今度は美冬が先に切り出した。その声がひどく困惑しているのは凧にも聞いて取れた。

「あのその……み……」

「み？」

「見ちゃったんだ」

「ん？……何を？」

その先を耳をそばだてて聞いた。なぜか嫌な予感がする。

「その……ちょ、ちょー速く走ってるところとか」

普通じゃないその面持ちで話す「超」とは、明らかに通常以上という意味だ。そのことが分かった凜はひどく動揺した。もしかしたらという、推測をして。

「ちょー高く飛んでるところとか」

その推測はどうやらあたってしまったようだった。

今の話からするに明らかに今日の、しかも今さっき少女を助けたあの時のことを言っているのはすぐに分かった。

そして同時に――焦った。

当事者以外の第3者にその力の一端を見せた暁には、凜のそのとき使った力について記した書にある内容に基づいて罰を執行される。それは死以外の死。

いや待てと凜は精神を正す。

あくまでそれは「力の一端を見せた」ことが、身内に「バレた」時の話だ。

だったらバレなければ、と甘ったれた考えを構築しているところで、急に家の電話が鳴り響いた。

その音に凜はびくりと肩を震わせる。

どうにも嫌な予感しかないその音は、黒板を爪でひっかいた時のそれとまるで似ていた。

カチコチに緊張した声で美冬に断りを入れ、電話へと近づく。ナンバーディスプレイを見てみれば、そこにはやはり見知った番号が映し出されていた。

凍土に放り出されたかのごとくふるえる手を制し、ゆっくりと受話器を持った。

「も、もしもし」

受話器を持ったはいいが、一瞬喉が詰まって声が裏返りそうになった。震えはしたが、それでもなんとか裏返る事態にはならなかった。

『わかつているな』

受話器の奥から聞こえるその声は洪く、そしてドスの利いた男の声だった。忘れることのない、凜をこの道に無理やり引きずり込んだ根源——祖父。

『今日の八時に来い。そこにいる目撃者もつれて』

世間話も何もあつたものではない。用件だけ伝えると一方的に電話を切られた。

ツー、ツー。受話器から聞こえるのはもはやむなしい音だけ。

受話器をゆつくりと置く。意識したわけでもないのに、乱暴な手つきとなってしまう。そこから一步も動かない凜を不審に思った美冬は声をかけてきた。

「どうかしたの？」

どうもこうも言っていられる状況ではない。凜の焦りは最高潮にまで到達していた。

凜は一気に美冬の元まで歩くと、その両手をつかんだ。美冬のひやッ、と女らしい悲鳴を上げ、少し顔を赤くしたのも気にかけず凜はその言葉を口に出した。

「俺たち死んだかもしれない」

——なんであんな場所にいたんだよ！

本当はそういいたかった。でもそれは違う。

自分の未熟さを偶然居合わせた他人のせいにして押し付けているだけだ。

向けるべき矛先は他人でなく、自分。

「へ？」

何を言っているのかわからないといった様子のリアクションをとる美冬に対して、凜の顔はまじめ極まりなく、そして青ざめていた。言いたいことと口から出てくる言葉が違ってしまふ。

「死なないけど死んだかもしれない」

「い、意味が分からないんだけど……」

愛想笑いで何かのギャグかと受け取る美冬。

死に準ずる何かなど、凜の経験上『死にかける』以外は浮かび上がらない。

そんなものはほとんど死んだも同然だ。確かに死にかけることはあったが、これから死にゆくわけでそんな時に冷静でいられるほど、凜は修羅場を潜り抜けてはいない。

「とりあえず説明は後でするから。その時にさっきの風木さんが見たそれも説明するから。」

あと、七時半までにまたここに来て。あ、あの爺時間にうるさいからな……やっぱもつとはやく。でも言いなりつてのも嫌だし、やっぱ最初通り七時半に来て。

あと、やり残したことがあったら今から七時半までに何かやっておくといいいよ」

苛立ちの募る声で矢継ぎ早に説明する。そのあと凜は美冬に残りの言っておかなければならないことまで言い終えたと、美冬をすぐに家へと帰した。

祖父は逃げれば何とかなる、とかそんな短絡的思考で出し抜けるような相手ではない。だからあの祖父から逃げられるとも思っていない。——腹をくくれということか。

一人しかいない12畳の空間はどうにも狭く感じる。いつもはそんなことないのに。

ああ、死んだのかな。

美冬の思い

（なんだっただろうあの動揺っぷり。しかも死ぬとか死なないとにかくわかんないし）

美冬は急に焦りだした凜に無理やり家を追い出された。

なんなんだろうかといういろんなことに疑問に思うこともあるが、今はそれどころではない。

凜には2つ指示されたことがある。凜が混乱して説明したものだから理解するのに時間を要したが、要約すればこうだ。

- 1、午後7時半にもう一度家に来てほしい。
- 2、それまでの間、何かやり残したことがあるのならば済ませておく（ただし、他人へのあいさつ等はしないこと）

これではまるでもう二度と帰ることができないかのような内容だ。その内容にいささか懐疑的な思いもあったのだが、あの状況から察するに、どうやら凜の超人的なアレは見えてはいけないものだったのかもしれない。

そしてそれを見てしまった美冬にも何かまずいことが起ころうとしているのも察せた。

それにしても、と美冬は思う。

（なんなのあの動揺っぷり。まるで世界が終わったかのような顔して。どうせあの超人パワーだって何らかのトリックがあるんでしょ）
笑って先ほどの光景を思い出す。

しかし美冬は今一つのことと悩んでいた。内容は簡単で、7時半にもう一度ここに来るかどうかというものだ。

ここに来ること自体は問題ないのだが、死ぬだのどうだのといった話を信じるわけではないのだが、しかしあの『普通マスター』の凜が本気の顔で言っていたのだ。

少なくとも、凜に何かあったこと自体は容易に察しが付く。

（だったら行くしかないっしょッ！ それにさっきの超人のトリックも説明してくれるって言うてたし）

美冬は未だ傍観者気分のせい、その足取りは異様に軽い。

第三者であつたが故に、これから当事者となるのにも気が付かず。

美冬は家に帰ると、さっそくバッグの到着を待った。

若干気が萎えたが、それでも念願の二十万円だ。うれしくないわ

けがない。今なら小躍りしてもいい気分だ。

自室のベッドの上で正座をしてじっと待つ。

到着は六時。現在時刻は五時半。あと三十分。その三十分が異様に長い。長すぎる。

一時間にも二時間にも感じられたその三十分。

刻々と動く秒針や分針。あと五分、一分。またその一分も長い。

まるでカップラーメンを目の前で待っている気分になった。

そして秒針はのこり十秒を切った。秒針は軽快な音を鳴らせて着々と進んでいく。

三、二、一、時計すべての針が同時に動いた時だった。

「……」

無音。

誰も来ない。なにも来ない。そこでようやく美冬は気が付く。

（つてそういうえば六時ジャストに来るわけじゃないじゃん）

寸分くるわず時間ちやうどに来れるほど運送業者はスペシャリストではない。

当然信号などの交通事情があるのだから、時間が前後する。あまりにうれしすぎ、テンションの高かったせいか、どうにも当然のことを忘れてしまったようだ。

恥ずかし、と美冬は誰もいない自室でつぶやいた。

つぶやき程むなしくなるものはない。まるで自分がさびしい一人ぼっちのような錯覚に陥る。

いつそのことツイッターにでも登録してつぶやこうか、と冗談で考えたその時だった。

ピンポン。

家全体にインターホンが鳴り響く。

「キターーーーーー」

近所の迷惑も考えずに大声を出し、机の上に置いてあった封筒を持って自室を飛び出して、階段をなりふり構わず降りていく。途中兄から「ウルセー！ 近所に迷惑だろ！」と自分も迷惑極まりな

い大きさの声で怒鳴られたが、そんなことを気にしていられる余裕はない。手に持つ封筒はグッシャグシャだ。

乱暴に玄関を出るとそこには運送業者の男性。

「こんにちは。代引きでお届けです。代金は二十万五千円となっております」

「はいはい。えっとこれ」

そういつて手に持ったぐしゃぐしゃの封筒からお金を出す。

一度に20万が飛んでいく瞬間など初めての美冬にとっては少々手痛い。渡したお金が手から離れるとき、若干力が入ってしまったのは仕方がないだろう。

特に気にすることもなくお金を受け取り、確認がてらにサインを美冬にさせて段ボールを渡すと、運送業の男性は軽快に「ありがとうございました！」と深く腰を折って早々にトラックへと戻っていた。

玄関をしめ、自室へと猛ダッシュで駆け戻る。

その時にも兄に「ウルセー！俺に迷惑だろ！」と怒鳴られたがそれも無視だ。

ベッドの上でガムテープを遠慮なしにどんどん破いてき、ゆっくりとその中に入っているブツを持ち上げた。ビニール袋に梱包されたそれを広げると、そこには念願になってついに手に入れたパデイントンバッグがそこにはあった。

高級感漂う綺麗な白い色を基調とし、バッグのちょうど真ん中の腹の部分にはクロエの象徴ともいえるべき落ち着いた金色のカデナ錠。それを見てやっと手に入れたんだという実感がわく。そのバッグに抱き着いてみたり、頬ずりしてみたくなくなってしまうのはどうしても仕方がないだろう。

一通り愛で倒すと、ふと気になった時計を見た。時計の針は午後六時四十分を示していた。

七時まであと二十分。

凜の言うことをすべて鵜呑みにするわけではないが、やはり先ほ

どの「やりたいことはすべて済ませておけ」という話が気になって仕方がない。

仮に自分がもうすぐ死ぬと仮定したとしても、死ぬ前に何がしたいかと問われて答えられる回答を持っていない美冬には、これからしたことなどそう見つかるはずもないのだが、どうしてもやり残したことを探してしまうのは人間の性ともいえるかもしれない。

真剣に悩んでみても思いつかない美冬は、とりあえず今思いつくプチ贅沢を施行することにした。

財布を持って急いで自宅を飛び出す。たどり着いた先は近所のコンビニだった。

（ま、今すぐできるプチ贅沢なんてこんなもんな。って言ってもいまどきのアレは侮れないからなあ）

美冬は出入り口の脇にある買い物カゴを手にとって、まっすぐデザートコーナーへと足を進めた。

最近のコンビニスイーツはまったく侮れないものだ。

所詮コンビニスイーツ、とバカにしていると、おそらく人生を損しているともいえる。

なぜなら最近のコンビニスイーツは、モノによってはわざわざそのスイーツの発祥国にまで足を運んで、研究しているのだから。ベルギーチョコを使うのならばベルギーへと赴くことも少なくないし、ケーキであればヨーロッパの様々な国へ赴くことも。

そして最も注目すべきはやはりその値段だろう。五百円を切る価格で本格スイーツを食べられるのは贅沢と呼べるだろう。

本当の味を知る上ではコンビニスイーツは物足りない感が否めないだろうが、安さと味を比較すれば間違いなく楽しめる味となっているのは確かだ。

美冬は陳列された商品の中で、今最も食べたいスイーツをかごに入れて、ついでにペットボトルの紅茶と一緒に購入した。

すぐさま家に帰ると、時刻は六時五十分。あと十分で食べきらなければ……と考えたのもつかの間、美冬と冬樹の家は比較的近所に

あることを思い出す。

凜の指定した時間は七時三十分。引っ張りに引っ張れば七時二十分までなら間に合う。

それをいまさらながらに思い出した美冬は、安心してスイーツに手を出した。

しばしの時間そのスイーツを吟味する。

003 始まりの地へと立つ（前書き）

ようやく異世界行きます。

その前に凜の正体もわかります。中二です。

ただ、召喚されたわけではないので「異世界召喚」とは言えないのかな……。

003 始まりの地へと立つ

凜の気は重い。もちろんここでいう『気』は気分のことであって、凜の力に関係はない。

「ハア……」

自然とため息をつく回数もいつもより多い。

普段学校で空気の読める人間を演じていた所為か、その反発のようになため息を家でつくことはあるものの、今日ほどではない。先ほどのを合わせてもう二十回にも上っていた。

もともとポジティブ思考ではない凜の頭には、どうしても今日の罰が浮かぶ。死、以外の死。

致命傷を負うことで死にかける。人格を破壊される。洗脳される。体に遠隔式の命を握る何かを埋め込まれる。

肉体的には死なないが、精神的に死ぬのだと凜は考えている。現にそれぐらいのことだったら凜の祖父なら可能だ。

「ハア……」

リビングにこだますため息が自分の耳に聞こえるたびに、モチベーションも下がる。

リビングのソファで前かがみに座り込んでいた体を背もたれに預け、次いで時計を見た。

七時三十分。もうそろそろ美冬が来る時間だ。

鉛でもついているのか言いたくなるぐらいに重い足を動かして玄関へと向かう。

外へ出るとすっかりと暗くなり、星々が自らを示すように光り始めていた。秋の夜風は思ったより冷たいが、もう外へ出てしまった以上上着を取りに行く気にもなれない。

外で待っていると、五分もしないうちに美冬は現れた。

別れた時と同じ学校指定の制服を身にまとってはいるが、出会った時と違うのはおそらく右肩にかけられたバッグだろう。いつもの

紺のナイロンバッグから、白いパディントンバッグへと変わっている。ずいぶんと高そうだと凜は思ったが、それは気にしても仕方がない事だと思い、特になにも言わないことにした。

「じゃあこれからある場所行くから」

「ある場所って？」

美冬は目に見えて警戒していた。年頃の男子が場所を明かさないのでどこかに連れて行こうとしたら警戒するのも当然か、と思った凜は説明する。

「俺のジーさんち。そこでちゃんとさっきの説明するから」

そういうと、ホッとしたように美冬は肩を下す。凜はそろそろ家を出たほうがいいと思い、車庫からバイクを取り出した。250? のカワサキ、エストリア。

凜の通う高校で自動車、バイク免許は「内定を受けたもの」や「大学に合格した者」など、今後の進路が安定している者に限って取得することを許可されているのだが、凜はまだ2年。

校則違反だが、いちいちそれを気にしていられるほど凜の神経は繊細ではない。二年に入ったと同時に軽い気持ちで取得した。

ついでに言えば、自動二輪で二人乗りをする場合、運転者は免許取得から一年は経過していないと道路交通法違反となるのだが、凜はこれも無視している。警察に捕まった時には素直に点数をもらうつもりでいるのだが、それまでは平気で行為を行う気があるという、まったくふざけた心構えである。

フルフェイスのヘルメットを軽く投げて美冬に取らせると、凜もヘルメットを装着してバイクにまたがった。

「乗って」

凜の声に、美冬は戸惑い気味に後部座席にまたがった。それを見た凜はしまった、と思うが、もう乗ってしまったのでいいか、と割り切った。

相手はスカートだ。またがるようにしたら見えてしまうことも懸念される。おそらく美冬はそれを考えて戸惑ったのだろうが、凜は

まったく気にせず乗せてしまった。まだ相手に配慮の足りない凜であつた。

秋の夜風を体で感じながら女性とドライブ、と聞けば聞こえもよく、男子としては憧れの対象かもしれないが、いかんせん行く場所が場所だ。テンションは最低だつた。

無言のまま、着々と祖父の家へと近づいて行つた。凜の家から車でおよそ二十分だたどり着く位置に目的地はある。二十分間無言のまま座っているのかと思うと、テンションの下がる凜であつたが、どのみちフルフェイスのヘルメットではワイヤレスのマイクでもついていない限り会話などできない。

結局不思議なことも何も起こらずに家へとたどり着いた。

しかも一番起りそうなバイクハプニングの定番である「後ろからの柔らかい感触」を頂くこともまったくなかった。というのも、凜の運転がうますぎるのだ。発進も停止もスムーズにできるおかげでそういったハプニングも起こりえない。確信的にやることも可能だが、凜にそこまでの根性はない。本当にそういったことはヘタレである。

凜は大きな目の前の木でできた門を押し開けた。

地元で一番大きな山の中腹に位置する凜の祖父の家は、はつきり言つてバカが付くほど大きかつた。

和で統一されたその家は百年以上前に建てられたもので、ところどころ痛んだ柱が見受けられるが、特に気にするほどでもない。それにきれいに手入れされた庭は古風な趣があつて、かえつてそういった傷や痛みなどがより古風を引き立てている。

その家に美冬は目を丸くしてボーッと立ち止まつてしまった。凜が顔の前で軽く手を振つてみると、

「すつご！ 雅柴君ちつて金持ちだつたの！？」

こついつた野次馬精神はデリカシーをまったく無視したものである。

家のことを言われるのはあまりいい気がしないが、知り合いに見せれば皆こういった反応をするのはもう慣れている。適当に「実家はね」と返してその話を切り上げた。

少し《五分》歩くと玄関が。

凜は玄関を開けて、家の中へと入る。遅れて美冬もついてきた。

「ごめんね風木さん。ちょっとお転婆だから」

「ううん。良いよ別に」

そんな話をしながら、家の中を五分ほど歩いて、目的の場所の目の前にたどり着いた。

障子張りの扉。

この扉を隔てた先に祖父がいる、と思うと緊張してしまう。だがもう来てしまった以上後には引けない。意を決して扉越しに声をかけた。

「ジーさん。来たぞ」

「入れ」

まるでそこにいるのが分かっているかのように間髪入れず、声が聞こえた。

電話で聞いた、渋いどすの利いた声。

凜は素直に障子をあけて中へと入った。ついでに「入って」と美冬に言って、入室を促す。

和室の空間で、特に目を引くものはない。

目の前に座る年老いた男をみて、凜は足がすくみそうになる。もうかれこれ80才にもなるうかという年にもかかわらず、その威厳は全く衰えていない。着物でいることがいつそうそれを際立たせた。鋭い目つきに見られれば、足が立ち止まる。体の皮膚が、筋肉が、臓器が収縮してく。これではまるで蛇に睨まれた蛙だ。

——男だろ！

自分に心の中で喝を入れ、かろうじて蛙にはならなかった凜は、ゆっくりと足を進めた。美冬はその怖さが分らないのか、物おじせずに平気で凜に続く。

「ま、座れ」

凜の祖父に言われて凜と美冬は横に並んで畳の上に腰を落とした。凜はまっすぐと祖父を見据え、相手も凜を見据える。瞳を合わせれば、身動きが取れなくなっただかのように体が固まった。

できれば逃げ帰りたいものだ。そうおもってしまったのは仕方がないくらいに、恐ろしく空気が重い。

凜の額から一筋の汗が流れた時だった。

「……ハァ、まったくお前は情けない」

ため息交じりに祖父は言った。先ほどまでの威厳は丸つぶれで、孫を叱るおじいちゃんな顔。

「お前はまだ未熟なんだからあれほど力を使うなと言ったろくに」

「だ、だけど目の前で子供が轢かれそうになったから」

幾分か気配が柔らかくなってきたものの、やはり苦手意識があるから声が震える。

「だから、そういう時は下手に手出しするなと」

これには口を挟まずにはいられない。たとえ自分が未熟で手を出してはいけないことが分かっているとしても、目の前でまだ小さい子供の命が失われていくなんてことを我慢できるはずもない。

「だったら見捨てろって言うのか」

「ワシ達は正義のヒーローではないんだ。下手に力が露見してみろ。一族そろって吊るし上げだ」

だがそれを言われると言葉が続かない。

結局自分と他人を秤にかけて、他人に傾けられる人間などそうはいない。それができるのは自分の命を顧みない熱血バカか、自殺志願者のどちらかだろう。

「まあ、起こってしまったのは仕方ない。それで、そちらのお嬢さんに説明は？」

凜は苦々しく首を横に振る。

「だったらワシから、と言って凜の祖父が美冬に向き直った。それに合わせて美冬も背筋を伸ばす。」

「お嬢さん。ワシは雅柴家当主、雅柴仁蔵。このたびはこの愚孫が迷惑をかけましたな」

「いえ」

仁蔵が頭を下げていうものだから、美冬も頭を下げた。

「この愚孫から説明を受けていないということは、何もご存じないと」

「ええ。すごく速く走ったり、高くジャンプしたりとかは見ましたけど」

「『動』を使ったということか……。ったく」

仁蔵は目を凜に向ける。向けられた凜はバツが悪く顔をそらした。そして目を美冬に向けなすと、仁蔵はなぜか後ろに少し下がった。凜にはその意図が読みかねる。

仁蔵はしばしの間、じつと畳を見つめて黙りこくる。静寂と言えは聞こえはいいが、実際は極度の緊張によって空気は重苦しいものだ。

やがて仁蔵は目を美冬に向けると口を開いた。

「——我ら一族は忍術使いの家系なのです」

「……」

美冬は何も言わない。否、何も言えないといったほうが正しい。

目の瞳孔は大きく開き、呼吸をしているのかどうかも分からないくらいにかちこちに固まっている。

「お嬢さん？ 聞こえておりますかな」

「え？ あ、すいません」

美冬は呼びかけられて顔を赤くした。

反応した美冬を見て仁蔵は説明を続けた。その声は先ほど凜を叱った時よりも優しい。

「忍術使いというのは戦前の正しい呼び方ですが、今は忍びとか忍者とか言ったほうがわかりやすいですか。まあ名称など所詮その呼び方なので、別にこだわる必要はないのですが、以後説明には忍びと呼ぶことにしましょうか。」

一般に知られる忍びとは、主に暗殺や諜報、破壊工作などを生業とする人間のことを指すのですが、これは一般と実際の認識に相違はありません。しかし暗殺や諜報といった事を成す作業方法だけは伝承の途中で一族の何者かが情報操作をし、正しく伝承されないようにしたようで、その時からこのように暗殺や諜報といった行為は普通の人間による行為という風に伝わったようです。

実際は我々のような普通ではない特異の力を用いてことをなす人間が行っていたのですがな。お嬢さんの見たそれがちょうど特異の力です」

仁蔵はそこまでいうと、右手の親指と中指でわっかを作って美冬に見せた。デコピンのような形だ。そしてそれを自分の前にある畳に向け、――放った。

突如鳴り響く轟音。放たれた畳はものの見事に穴が開き、下地の石までが見えていた。その周りも衝撃によってぼろぼろになっている。

音に驚いた美冬は目をつむって肩をすくめ、その直後に畳を見てその大きな目を見開いた。

何の仕掛けもなしに轟音が鳴り響き、直後に畳には穴が開いていたらば、それは驚かないほうがおかしい。

凜はもちろん仁蔵が何を起こすがすぐに分かったため、特に驚くこともなかったが、この実演をするために、少し身を下げたことまではわからなかった。

凜にはそれが歯がゆい。自分が未熟だと痛感する。

「実際に見てもらえるとどういったものなのかわかるかと思い、実演させていただきました」

硬直する美冬に仁蔵は説明を続ける。

「詳しいメカニズムはお教えできませんが、というよりお教えしても普通の方ではご理解できないものです。それでこういった力を用いて事を成すのが忍びだということまでは説明しましたな」

同意の意で美冬は首を縦に振った。先ほどまでは動揺していたよ

うだが、落ち着いているようだ。

「我々一族はこうした業を代々に伝えていくことでこの力を守っているのですが、本来こういった特異の力とは公にされることを許されないのです。この力ひとつ公になるだけで、今まで保たれていたいろいろな均衡が崩れてしまうのは目に見えていますからな。まあだからこうして未熟なものには使わないように言っているのですが、結局はお嬢さんにはバレてしまいましたなア」

好々爺のように笑う仁蔵に、美冬はどういった反応をしているのかわからないようで、なんとなく愛想笑いでごまかしていた。

「それでお嬢さん。なぜ自分が呼ばれたのかはお分かりですか？」

美冬は首を横に振った。その反応を見て、仁蔵は顔を苦めた。

「本当に申し訳ないとは思うのですが……。この愚孫のせいで、お嬢さんまで同じ罰を受けなくてはいけないのです」

美冬の顔は驚きをあらわにした。しかしそうかと思えば、なにやら納得した様子でうなずいてもいる。

「特異の力を当事者以外の第三者に見られた場合、特異の力について書かれた書「忍びの奇書」の内容に基づいて、その罰を執行しなければならぬのが決まりなのです」

美冬はただただうなずいているばかり。

「じーさん。それで俺らはどうなるんだ？」

間が持ちそうにないと思い、凜は助け舟を出す。

「ああ、今から蔵に行く」

先ほどの好々爺とは打って変わって素の無愛想な声で答えた。

「蔵？ あんな場所になにかあったか」

「当主にしか伝えられていないものというものがある」

そういうものかと思い、凜も口を閉ざした。仁蔵は「よっこらせ」と柄にもないことを言いながら立つと、凜と美冬の後ろの扉をスツとあけて出ていった。

その出ていく一瞬に凜を一瞥したのは間違いではないだろう。その意図はおそらく「蔵に来い」

「トントン拍子で話が進めてわからなかったかな？」

凜は正座を胡坐に変え、戸惑い気味に美冬に話しかけた。

蔵に行くのは美冬を落ち着かせてからでも遅くはないと判断したからだ。

「ちよつと話が突飛すぎて信じがたいこともあったけど、お爺さんのあのデコピンには驚いたかも」

アハハ、と苦笑い気味に美冬は笑った。

「まあ仕組みとかはわからないこともあるだろうけど、とりあえず要点としては“俺たちが忍びである”ってことと、“一般に知られる忍びと現実が違う”ってことと“俺のせいで風木さんも罰を受ける”ってことかな」

最期はバツ悪く言う。

「うん。そこは理解した。まだすべて信じるのは無理だけど、とりあえずは……大丈夫」

「そつか。じゃあそろそろ蔵に行こうか」

「うん」

二人は立ち上がって、廊下へと出た。歩きがてらに雑談をしながら話す。

「なんかごめんね。俺があそこで力使わなければ風木さんも巻き込むことなかったのに」

「いいって。もしあそこで雅柴君が特異の力が使えるのを私が知ってたら、“あの子を見捨てた！”って軽蔑してたし」

「もつと熟達した人なら光をいじって姿を見せないようにすることぐらいできるんだよね」

「へえ。忍術ってそんなこともできるんだ」

「ん、正確には忍術ではないんだけどね。もともと剣道とか人心術とか、忍び逃走するときに使う術を総称して忍術っていつてさ。だから俺が使ったアレは「奇術」の一種なんだよ」

「キジュツ？」

「気分の『気』と奇妙の『奇』を掛けてキジュツなんだけど。気

を用いた奇妙な業つて意味」

「なんかマンガみたいだね」

「これが創作だったら確実に『中二病』呼ばわりされるのが目に見えるけど」

そんなシャレで二人の笑い声が廊下を駆け抜けていった。

行きとは違う道で玄関までたどり着いた。

本来ならば行き帰りも5分と掛からず移動できる距離なのだが、仁蔵が『修行の一環』と称してテンプレートのごとく家をからくり屋敷にしまったおかげで、通れる道と通れない道が存在してしまったのだ。だから一見普通に見える道も、いろんな仕掛けが施されている。

しかし結局、これは道を覚えてしまえば面倒なりとも迂回すればいいので、その数週間後にはもはや意味のないものとなってしまうた。

玄関を出て右の庭へと出る。

弓道場や小さな武道館など、心身を鍛える施設が立ち並ぶ横を通り過ぎ、家の敷地の角に位置する場所へとたどり着いた。

一戸建てが作れそうな敷地面積を使つてできた蔵は、古ぼけた印象は全くなく、汚れといった汚れも見当たらない。まるで新品に見えるのはその通りで、2年ほど前までは今たてられている位置とは敷地の対角にあったのだが老朽化が深刻化し、仕方なく建て替えたという始末だ。

その蔵の扉の前には仁蔵の姿。

「来たか」

そういう姿はさきほどの好々爺とはまるで違い、今日会った最初の姿を思い出す。

「ここに何かあるのか？」

凜のその問いに仁蔵は答える代わりに扉を開けた。中は埃っぽさも力臭さもない。雑多に置かれた品々は、今にも壊れそうなぼろ

ぼろのものから、売れば零がいくつつくのかと問いたくなるぐらい価値のあるものまでさまざま。

そして奥の一角へと足を運び、その前で立ち止まった。

「これが？」

「ああ。異門の壺と呼ばれておる」

そこにあつたのはずいぶんと古めかしい茶色い色をしたぬか壺のようなものだつた。

しかしそれは普通とは明らかに異なる。その理由は至極簡単で、蓋と本体をつなぐように札が貼られてあつた。

「もしかしてこの中にいる何かと戦うとか？」

凜の問いかけに仁蔵は答えない。

それを手に取つて外へ行き、それを地面へと置いた。美冬は興味深くそれを眺めていたが、凜としてはこの壺が穏やかなものであるとは思っていない。そこに貼られた札はかすれてよく見えないが、明らかに何かを封じている類のものであることは、発せられる気から見当がついた。おそらく破邪の霊札か何か。

「開けてみる」

そう言つて仁蔵は後ろに下がつて距離を取つた。

これを開けることに少なからず抵抗はある。そもそも触ることすら抵抗がある。だが、

「これが罰つてことか？」

「ああ」

短く仁蔵は答える。

それならばその罰を受けなければいけない。申し訳ないが美冬にも同じことを受けさせなければ。

「開けるけど心の準備はいい？」

凜は美冬に聞いた。

「うん」

短く、しかしはっきりと答える。

「行くよ」

声と同時に凜は貼られた札を引っぺがした。そしてゆっくりとその蓋を開けた。

「ッ！」

突如その中から光。

凜は慌てて距離を取ろうとしたのだが、まるで麻酔を打たれたかのように体の感覚が抜けていく。踏ん張るにも力の入れ方が分からなくなってしまうた体ではどうにもならない。

凜と美冬の体はすぐに地面へと着いた。

「それがお前たちの罰だ。すまないな、お嬢さん。これから大変な未来が待っておるかもしれん。だが絶対にあきらめるでないぞ」

（ふざけんなよ、クソジジイ！ 俺には一言もなしかよッ！）

凜の思いも言葉にならない。

何が起こっているかもわからない。だんだんと意識のほうまで遠のいてきた。

ボーツとのぼせたような、脳がうまく働かない。

光は天高く伸びあがり、そして凜と美冬のもとへと降り注いだ。

（死ぬのか……）

必死の抵抗むなしく、凜の意識は刈り取られた。

そこに残されたのは仁蔵と、光が収束されて壺の中に戻っていく異門の壺のみ。

「本当に……すまん」

仁蔵の声はかすれるほど小さい。しかしかすれた分だけそれは、仁蔵の切実な願いだった。

美冬へ降り注ぐ現実

「ん……」

まどろみの中、目に刺さる光に呼ばれて瞼を持ち上げた。視線の先には真っ青な空が一つ。

体を起こしてあたりを見回せば、そこがどこだかわかった。正確

には「どういった場所」かがわかっただけで、「なんという場所」かはわからない。

そこには木があつた。何千何万という数の木が。降ってくる落ち葉は太い葉脈から派生するように細い葉脈が広がっているとところを見ると、広葉樹であることがわかつた。

そして、どうやらここはその木々の少し開けた空間であるらしい。そんなことを推察していると、頭に鈍い痛みが走つた。

そしてその痛みの中、先ほどの光景がフラッシュバックしてきた。蔵、壺。

「さつきまで雅柴君の家にいたはずなのに……」

つぶやくのは好まないが、自然とこぼれてしまう。

「ッ！ 雅柴君は？」

だつたら凜も同じ場所にいる、と気づいてあたりを見回せば、地に伏せる凜の姿がすぐ近くにはあつた。

「雅柴君！ 雅柴君！」

美冬はあわてて駆け寄つてゆすると、

「ん……風木……さん？」

美冬の呼びかけに、凜は眩しそうに目を開いて言った。

「よかったあ」

「えっと……なんで俺ここにいるんだっけ？」

凜はどうやら記憶が混乱して思い出せていないらしく、そんなことをつぶやいていた。

「私たちさつきまで雅柴君の家にいたんだよ？ それで、罰を受けなくちやいけないってことになって、へんな壺の中に入って」

そこまで説明すると、凜は頭を抱えて起き上がった。

「アタタタ……思い出せた。ありがと」

苦笑気味にお礼を言う凜に、美冬は笑顔を返す。

凜は立ち上がつてこの開けた空間の真ん中まで移動した。そしてそこで静かに目を閉じる。

（なにやってるんだろ？）

美冬が疑問に思うのも無理はなく、凧はじつとそこで立ったままだ。

そして凧は目を開くと、一つため息をついてトボトボと戻ってきた。

「何してたの？」

「ちょっと周りを探ってみた」

「それもキジユツってやつ？」

「うん。でも……」

バツが悪そうに眼をそらす。

「特に手がかりもないってことかな？」

「ぶっちゃけると、そう」

案の定、ここがどこだかはわからないようだった。

「風木さんここに見覚えある？」

凧は気を紛らわすかのように、少し明るい声で美冬に問いかけた。

「全然。林か森かってことぐらいはわかるんだけど……そういう雅柴君は」

「俺もまったくわからない」

凧は肩をすくめてそう言った。

これはかなりまずい状況なのでは？ 美冬はそう思う。

ここがどこだかもわからない。食料もない。特異の力が使える凧にもわからない。

つまりこれは極限状態。

「どうしよう……」

そんな言葉が不安な心から漏れ出た。本心であり、同時に少し凧と自分を呪った。確かに少女を助けたことは大いに評価すべきところなのだが、凧がもっと万能であれば、美冬が気が付くこともなかったのだと思ってしまう。そしてそんな理不尽を思ってしまう自分の心が嫌だ。

凧はその声に気が付くと、こちらまで歩いて来て、目線を合わせるようにしゃがみこんだ。その目は真剣に。

「大丈夫。何があっても俺が何とかするから。もともと俺のせいでこうなっちゃったんだし、絶対に風木さんが危険な目に合うようなことはしない。だから信じてほしい」

はつきりと凜は言った。美冬の目をしっかりと見据え、ぶれることのない芯のこもった声で。

——信じるよ。

凜のはつきりというその姿に、美冬は心の底からそう思っただけで、そうになったが、口に出すのは身が悶えるほど恥ずかしい。

美冬は一つうなずくだけで済ませた。凜も同じようにうなずくと、また立ち上がって何かを考え始めた。凜が離れたのにもかかわらず、なぜか動揺は収まらない。頬が紅潮して熱く、心音は高鳴って速くなるばかり。

（なんで！？ 別に雅柴君とはただのクラスメイトだし。なのになんでこんな顔赤くなってるんだろ？

でも好きとかじゃないよね？ これはあれだよ、あんまり仲良くない人が急にあんなこと言ったからちよつと動揺しただけだよ）

必死に自分に言い聞かせるその思いは真実か偽りか。
今その真偽はまさに神のみぞ知ることだ。

003 始まりの地へと立つ（後書き）

忍びwww

みたいに感じるかもしれません（汗）

忍びのこといろいろ説明してますが、もちろん嘘ツパチです。

ただ、戦前「忍術使い」と呼んでいたことや、剣道や人心術などの遁走術とかをまとめて忍術と呼んでいたのは事実らしいです。けどそもそも忍びが本当にいたかどうか、未だに議論されているとかされていないとか。

まあそんなわけで“これは資料に基づいて——”とかはないので、そこらへんはご理解お願いします。

2011年1月18日 編集（真希とのやり取りをカット。ただ、もちろん存在を消したわけではないので、今後いつかは出す予定です）

004 真相、そして出会い（前書き）

004 真相、そして出会い

食料なし。現在位置不明。

この二つの条件が揃うとき、それは極限状態を意味するだろう。現在位置が不明であればどの方角を目指せばいいのかが分からない。しかし、だからと言っていつまでもこの場にとどまっていることもできない。どの道とどまろうにも最低限食料の確保は必要だ。それも今は何もない。

「どうしよう」

不意に美冬がつぶやくのが聞こえた。

この極限状態の中で、普通は不安にならないほうがおかしい。凜の場合は修行の一環で、一週間山でサバイバルさせられることがたびたびあったため、たとえ野宿となってもこのぐらいの野宿はどうにでもなる。

しかし美冬はどうか。今日の今さっきまでごく普通の、どこにもいる高校生をやっていた人間が、いきなり野宿などできるのか。答えは“できない”だ。

自分のせいでこんな事態に陥ったのだ。自分の未熟さが災いをなして美冬を巻き込んだのだ。だったら少しでもその不安を取り除くのが今自分のやるべきことではないのか。

凜はそう自分に問いかけた。

——だったら、

「大丈夫。何があっても俺が何とかするから。もともと俺のせいでこうなっちゃったんだし、絶対に風木さんが危険な目に合うようなことはしない。だから信じてほしい」

“何があっても君は俺が守る”ぐらい言えばいいものの、テレがあるのか何ともはつきりしない答えとなってしまった。美冬の反応はと言えば、うつむいて小さくうなずくのみ。

その反応が凜には“信じる”とも“信じない”ともどちらにもとれたため、結局成功とも失敗ともいえないひどく微妙な結果となっていた。

しかし、できるだけ早急に美冬を安心させるに越したことはない。そのためには、やはり今後の方針を決めておくべきだろう。そう思った凜は早速思案し始めた。否、しようとした。

空からの飛来物。サクツとあつさりした音とともに、凜の付近の土に突き刺さったそれは苦無だった。十三、十五センチメートルほどの大きさから推察するに、大苦無と見受けられる。そしてその苦無の後部の輪の部分には何やら紙が巻きつけられていた。

凜は一度空を仰ぎ見たが、そこは快晴の空ただそれだけで、誰かが投げたわけでもない。

美冬もそれに気が付いたのか、立ち上がって近づいてくる。

「何それ？」

「苦無……とそれに巻きつけられてた紙」

凜は手に取ってその紙を解き、クシャクシャになったその紙を伸ばして何か書かれているのか確認した。

『これを見ているということ、一応は無事ということだな。

紙にも限度があるからさっそく話を書かせてもらうが、おそらくそこは地球ではない。

それ以外はわからないが、生きているということは地球生物が活動できる場所であるということだろう。食物が人間の体に合うかどうかまではわからないがな。そこらへんは注意しておくといいだろう。

その世界からの脱出方法はないわけではないが、正直かなり難しい。

方法は“その世界に認められること”だからだ。世界が人を表すのか神を表すのか、定義がはっきりしない以上は認められるもくそ

もない。その答えを見つけた時、そしてそれを実行できた時、初めて元の世界に戻るだろう。

それから、二人が同じ場所にいるとは限らないことも踏まえて、一応片方ずつに言葉を残しておく。

まず凜。お前がお嬢さんを巻き込んだんだから、責任もって世話しろよ。

そしてお嬢さん。凜のふがない力がこんな結果を招いて、本当に申し訳ない。

わたしにはできることもない。あとは己の力を武器に進むことだ。生きて帰るを事を切に望む。

雅柴家当主・雅柴仁蔵』

達筆な文字で書かれたそれは、仁蔵からの手紙だった。

その内容は凜を大いに混乱させた。

どうやらここは異世界らしい、——と言われて“はいそうですか”と二つ返事で納得できるほど凜も単純ではない。

そもそも「異門の壺」の中に入っていたのではないのか？ 正確な位置こそ分からないものの、凜は異門の中だとばかり思い込んでいた。それがまったくわけのわからない異世界。

いきなりそんな突飛なことを言われても簡単に信じられるものではない。その思いに同意を求めて美冬を見れば、

「ここ地球じゃないんだ」

——違った。その現実をあつさりを受け止め、解釈していた。

「……なんでそんな簡単に納得できるの？」

凜には理解しがたかった。そんな簡単に納得できることが。いきなりこんな森に放り出された不自然はあったが、それは仁蔵

がやったことだと検討がつけられる。しかし、そこが異世界と呼ばれるにはさすがに現実からかけ離れている。

「だって雅柴君が忍者って言われてすごい力見せられて、そのあとに異世界ぐらいきてももう驚かないよ」

美冬は苦笑気味にそう答えた。

その答えに凜はそうか、と思う。美冬からすれば、凜や仁蔵の使った奇術は十分に現実からかけ離れているのだ。だから次にまた現実からかけ離れてた事態に陥っても、不安こそあれ混乱はしなかったのだろう。凜は自分と美冬のものさしが根本から違うものだと、いまさらながらに理解した。

そして美冬はそれに、とつけて続きを話す。

「雅柴君のお爺さんでしょ？ それぐらいやつてもおかしくないよ」異世界への転送は忍びがすることでもないのだが、あらゆる業を身に付けた仁蔵であればそれくらいできるかもしれない。本気でできると思えることが凜には恐ろしかったが。

そして「異門の壺」という文字にも理解がいった。異門の『異』は異世界を表し、異門の『門』は文字通り門を表す。そう考えれば、『異門の壺』とは異世界をつなぐゲートのようなものと判断できる。しかし異世界とは言うが、そこからの脱出方法はつきりとわかっていない。

『世界に認められる』仁蔵の手紙に書いてあったように、ここでいう世界の定義がいまいすぎる。どのみち行動しなければ前には進めないし、その手がかかりもつかめないのだが、四方が森に囲まれたこの場でどちらに何があるかわからない。周辺を探してみれば木以外は何もなことが分かっている。

この場にとどまることもできなければ、どこに何があるかが分からない以上はどこかに移動することもできない。だったらどちらかを取らなければいけない。

自分一人の判断で決めていいものかどうかと思い、美冬に聞こうかと思ったが、もともと自分のせいであつたのだし、それ以前

に美冬だつて異世界を認めこそすれ、不安なのは変わらないのだ。
だったら自分で決めるしかない。

「とりあえず、どこか歩いてみよう」

「どこかってどこへ？」

「わからないけど、食料がない以上はいつまでもとどまるわけにも
いかないし」

美冬は食料がない現実を突きつけられて少しひるんだような表情
を浮かべたが、いつまでもとどまっていられない現状を理解したの
か、そこははつきりとうなずいた。

「バッグ、とつてくるといいよ」

バッグを指さし美冬に言つて、凜は手に持つ苦無をいじりはじめ
た。重さもしっかりあるし、比率も前方によつていることから、実
用性も十分ある。いざとなつたら近接、遠距離戦闘にも使えるこれ
はかなりありがたい。罰を食らつたのは自分の責任だし、今回ばか
りは苦無を届けてくれた仁蔵に感謝した。

歩けど歩けど木ばかりな現状は、二時間ほど足を進めた今でも変
わりはなかった。

「……………いつになつたら……ここ、出れるの？」

「わかつてたらいいんだけどね」

疲れが限界に達し始めた美冬に対し、未だ余裕な凜は苦笑を浮か
べて返答した。

しかし、限界の美冬をいつまでも歩かせるのは少々酷だ。

「少し休む？」

「え……………うん」

素直な分だけ疲れていたようだ。

美冬は近くにあった木に寄りかかつて座り、凜も向かい合うよう
に別の木に寄りかかった。

本当はおんぶなり抱っこなりして移動することもできるのだが、
それはあまりにもデリカシーにかける。それにそんなこと凜のヘタ

レさではまず口にすることが無理だ。

二人の間は無言が支配する。もともと仲が良くなかった二人には、まだ気軽に話すには期間が短い。

間が持たないと思った凜はなんとなく周りを探索し始めた。

風をつくりだし、自分を中心とした半径五百メートルへと送る。

その中に自分の気を織り交ぜることによって、その風は己の手となり足となる。といっても有効範囲が百メートルの時は“物体の形がわかる”のに対し、五百メートルまで広げると効力は落ち、せいぜい“そこに物体がある”という程度しかわからない。それでも生物がいればその物体が動いていることまでが分かるから、有効範囲は五百メートルでも構わないのだ。

？

凜の探索効果はあった。およそ四百メートルほど先に空間があり、動く物体があるのを探知できた。しかも形が縦長でかなりの数であることから人間の可能性が高い。百人近くを超えている。

集落でもあるのか、と凜は推察した。

「風木さん。ここから四百メートルぐらい言ったところに人がいるみたい」

「ほんと!？」

その声は今までの不安が一蹴されたかの明るさだった。

うん、と肯定するとその顔には笑顔が戻ったが、その反応に凜は少し戸惑う。

大きな目は綺麗な黒瞳を備え、整った鼻筋に薄ピンクの桜を思わす唇。念入りなトリートメントのされた腰まで伸びた黒髪に対し、雪のような清潔さが印象的な肌。柔らかな曲線を描いたボディラインは不健康でない程度に細い。

これだけの美しさを備えた美冬に笑顔が付加されれば、その魅惑の力は絶大だ。たとえ好意を抱いていない者でもドキリとさせられる。

だが今はその煩惱を棚上げすることにした。

「じゃあ今から行こッ！」

先ほどの沈んだテンションがまるで嘘かのように、美冬は立ち上がって言った。その反応が現金で、凜は思わず笑いが込み喘げてきた。

「ちよつとッ！　なんで笑うの」

「いや……ククッ、ちよつと風木さん……」

笑い続ける凜に美冬は不機嫌な顔をしたものの、今は凜の反応よりこの先にある人の姿が見たいらしく、すぐに行こう、とはしゃぎ気味だ。

少しして笑いが収まると、凜も立ち上がって歩き出した。

たかが四百メートルなのにもかかわらず、今にも待ちきれないといったように美冬の足が早まる。

そして四百メートル歩いたそこには――

「え、……な………にこれ」

そこには獣がいた。大きな大きな獣が。ごわごわな藍染の着物よりも深い藍色をした獣毛を携えたそれは熊に近い形をしており、しかし明確に熊とは異なる。その機動性を重視した四肢や体はもちろんのこと、目は鈍く、血よりも濃く紅く光り、手につく爪は太い腕と合わさって迫力はすさまじい。

どうやら集落という予想は当たったようで、サッカーコート三分ほどの空間には木でできた様々な家があり、そこには多くの人がいた。が、その表情は恐怖そのもので、悲鳴を上げたり恐怖で足がすくんでいるものが大半だった。

ゆうに三メートルを超すその巨体は、近くにいた一人の少女へと迫った。

「またかよッ！」

凜もすかさず反応し、手に持っていた苦無を獣に投げた。苦無が風を切る間に獣との距離を詰める。当たった苦無は腕へと突き刺つたものの、それをものともせずとその目をこちらへ向けた。

「グルルルウウウ」

「風木さん！今のうちにあの人移動させてッ」

「う、うん」

唸る獣に美冬は恐れを抱いていたものの、凜の言葉でハッとしたようで、急いで迂回して少女のもとへと駆けた。美冬の行動力には感謝しつつ、凜も獣と対峙した。

対獣戦闘の経験はないわけではないが、ほとんどは対人戦闘の修行だったし、あったとしてもそれは式神との戦闘だ。今日の前に対峙する獣に最も近いのは、陰陽道も心得た仁蔵の作り出した十二天将は『白虎』。

熊と虎では形も動きも違いすぎで参考にはならないが、しかし対獣戦闘という経験は大きい。

襲いくる獣は凜へと迫ったが、慌てず気を全身の経絡へと集中させる。

来る獣は飛びかかった。その獣の顔面へ回し蹴りを決めて突き飛ばす。何百キロもある巨体を突き飛ばした衝撃は大きく、その分だけ片足が地面へとめり込んだ。

思ったよりあたりは弱い。獣はめげずにまた立ち上がり、その強靱な四肢でまた迫る。

拳の近接格闘は不利で、長期戦は面倒だと判断し、凜も攻めに入る。タイミングを合わせ、わずかにできた隙に一瞬をついて相手に刺さった苦無を抜き取り、その苦無を振動させてその太い首に深々と突き刺した。

「グアアアアアアアアアアア」

凜は苦無をえぐって抜き取り、バックステップで数メートルの距離をとる。苦無を抜いた瞬間に紅い血がどくと止め処なく流れ出た。仁蔵の作り上げた式神からは血は出ないから、このように大量の血を見るのは初めてだ。殺してはいないが生命を刈り取る行為であることには間違いない。そこにひどい罪悪感がわいたし、吐き気も催した。

えぐられたその痛みに咆哮を上げて凜を睨む。対して吐き気のす

る凜は、その罪悪感を必死に意識の奥に追いやった。
にらみ合う数瞬。

負けたのは獣。クウンと甲高い悲しげな声を上げて、前足を引きずり首の傷口を気にして森の中へと帰って行った。

苦無を見れば、獣の地がべつとりと付着している。見るたび罪悪感とともにどこかへ行った吐き気がまた戻ってくるが、ここですらまでも吐き気と格闘しているわけにもいかない。

すぐにしゃがみこむ少女と美冬のもとへと駆けた。

「大丈夫？」

「ッ！ それが……」

こちらを向いた美冬の視線はすぐに苦無へと向かい、そこへ着いた紅い血を見て、動揺を見せたがすぐにそれを隠す。

せっかく自制して動揺を隠した美冬に謝るのはかえって失礼かと思ひ、凜は少女に目をやった。瞬きをしているところを見ると、少女は生きていらしいので生死の問題ではないらしいし元気そうだ。そうなると、

「もしかして……言葉が通じないとか？」

ハズレを願ってで言ってみれば、美冬はバツ悪げにうなずいた。

異世界では言葉の通じるオチがよくあるが、現実問題はそこ甘くはなかった。

どうしたものかと考えたが、とりあえず自分で話しかけてみる必要がある。

「あの……」

できるだけ声を柔らかく、相手に警戒心を与えないように。

十歳後半に見える茶髪をロングにした少女は、言葉が通じないことが分かっているのか、立ち上がって凜にすぐにお辞儀をした。日本人のようにお辞儀をするに若干の驚きがあった。

日本でお礼をするときはその多くがお辞儀をするが、ヨーロッパなどの場合はお辞儀という習慣はなく、笑顔で目を合わせるに留まることが多い。それは目をしっかりと見つめることが誠実さにつながる

がるからだ。

凜がそこまで知っているわけではないが、それでも日本とは違う文化圏であることを自覚した。

そして少女は一度腕を横に向けると、その方向に歩きだした。

「ついて来てつてことかな？」

「そうだと思うよ」

美冬の問いかけに凜は同意して、一緒に歩きだした。——その前に苦無は美冬の持っていたハンカチで仕方なくふき取って、ブレザーの内ポケットに入れておいた。

道に広がる人々は蒼い目であつたり堀が深めであることから、欧州系の血が濃いイメージを受けた。

道中いろいろな人に目を向けられるのだが、その目に含まれる意図は様々だった。獣を追い払ってくれたことに対して感謝の意を乗せた視線もあるが、それよりも多いのは奇異の目。獣を倒した力に對してなのか、それともアジア系統の顔が珍しいことに対してなのか、それとも二人の学校指定制服という変わった風体なのか。まわりの人々は麻や絹のような植物性の簡素な衣類をまとっており、ポリエステルでできたブレザーというのは明らかに周りと浮く。

どちらにしろ居心地が悪いのには変わりがなかった。

美冬は露骨に居心地が悪そうにうつむいていたが、それを見た凜は一步よって耳元に声をかけた。

「あんまり下向いてるとなめられるから、こういう時は堂々としてたほうがいいよ。一応こっちは恩人……だと思っし」

「ッ！ うん、そうだね……」

凜の顔が近すぎて驚いたのか、美冬は少しのけぞるが、言うてい

ることを理解して肯定してすっかりと前を向き、凜より少し前に出て歩みを進めた。若干頬が紅いのは気のせいだろう、と凜は美冬の頬の赤さを特に気にすることはなかった。

この森の集落で最も大きいと思しい家の前にたどり着いた。

異世界ということ、凜も美冬も大きな家は西洋の煉瓦作りやゴシック調をイメージしたのだが、実際は木の茶色を基調とした、というかそのほとんどを木で構成していた。しかし逆に考えてみれば、森の集落に建てられた家々は木造が基本なのに一つだけゴシック調というのも、周りとの差別化を図る意味では効果的だが、明らかに協調性を乱す。

少女は一度振り返り、また玄関を示すように腕を向けると、また足を進めた。

玄関を開ければ、外観よりも整った印象を受けた。木でできていることに変わりはないのだが、清潔感があるし、形は貴族の屋敷のようにも見える。あくまで形はだが、エントランスから二階に伸びる階段が曲線を描くように二つあり、その横には両端に伸びる廊下があり、廊下の両側には多くの部屋が設置されていた。

「どこなのかな？」

美冬はきよきよと内部を見渡しながら凜に問うた。

「まあ家の規模は周りと比べても大きいし、長とかだと思うけど」

少女は階段を上り、左の廊下を歩き始めた。ついていく二人。

たどり着いたのはもつとも端の部屋だった。ほかの部屋の扉が一枚だったのに対し、こちらは2枚の両開きとなっている。

少女はソックをして引き扉を開け、手を凜たちに向けて少し待っているように促すと、中へと入っていった。そして五分もしないうちに扉はまた開かれる。中へ入ればそこも変わらず木でできた飾り気のない部屋だった。しかし家具はある程度は凝った造りになっていることから、多少はいいものなのかと凜は推測した。

そしてその机に構えていたのは三十代に見受けられる女性。茶髪を膝のあたりまでだいぶ伸ばした女性は凜たちにニコリと笑みを浮かべると、何やら二人へ近づいてきた。

握られた手を開くと、手のひらにはエメラルドのようなきらめく宝石のはめ込まれたペンダントが二つあった。手に取るようにジェ

スチャーで促され、二人はそれぞれペンダントを手取る。

そして手に取ったペンダントに、凜、美冬の順で女性は軽くキスをした。驚いて凜は手を引っ込めそうになるが、ぎりぎりのところで自制する。

「言葉はお分かりになりましたか？」

突然、凜が助けた女性が声をかけてきた。そのことに凜も美冬の驚きをあらわにする。言葉が通じないことを直に体験した美冬は尚のことだ。

「はい。だけどこれはどうやって……」

「それはその手に持っているペンダントの効果よ」

今度は三十代の女性が話しかけてきた。やさしそうに笑みをこぼすところを見ると、母親のような感覚に陥る。母性本能が強いのだろうか。

「そのペンダントというか宝石には、意思と意思をつなぐ力を持っているのよ。だから言葉が通じなくても意思が伝わる仕組みになっているわ。その効果を得るためには、通わせたい言葉を話す人間の体の一部をそのペンダントに触れさせないといけないのだけど。けどそのペンダントがある限りは少なくともこの村では言葉が通じるわよ。その証拠がこの子と話していることね」

女性は続けて説明をし、最後に少女を示すように手を向ける。

キスの理由がペンダントの効果を得るためだとはいえ、今の説明なら手で触れるだけでもいいのではないのかと凜は思うのだが、せっかくの厚意をいちいち掘り下げる必要もないと思い、特にそのことに関しては何も言わないことにした。

「ありがとうございます。言葉が通じなくて困っていました」

「全然構わないわよ。むしろこの子を助けていただいたことをこちらが感謝しなければいけないもの。本当にありがとうございます。事はこの子からすべて聞かせていただきました」

いえいえ、と謙遜をしながら凜は頭を下げる。

「自己紹介がまだでしたわね。わたくし、ミリフィ族長・フェイル

と申します。この子は私の娘のスフィと言います」

フェイルが自己紹介をし、ついでに少女——スフィの紹介をする。紹介をされてスフィが「初めまして」と頭を下げた。スフィが娘にしてはずいぶん若く見える。

「こちらこそ初めまして。え〜っと……旅人のリンと言います。こっちは旅人仲間の……ミ、ミッフィーです」

凜は偽名で何とかごまかす。どこかのウサギのような名前に、美冬は自分のことながらツボに入っただのか、笑いを必死にこらえていた。

ちなみに偽名にしたのは下手に本名を言つて、別世界から来た人間だということを悟らせないためだ。ちなみにのちなみに凜がそのままなのは響きが日本以外でも通用しそうだからだ。

「旅人の方のことですけど、宿のほうの当てはありますか？ もしないのであれば部屋をお貸ししますが」

「本当ですか？ ありがとうございます」

フェイルの厚意にありがたく甘え、今日はここを宿とすることにした。

その晩

「フェイルさん、このペンダントはいつお返しすれば……」

晩。手料理をごちそうした時、凜はそう聞いた。

それらの料理は山の幸を使った炒め物がほとんどで、比較的ヘルシーなものが多かった。異世界の料理ということもあって、仁蔵の手紙の一文が思い出されたが空腹には耐えられず、結局満腹になるまで食べた。塩味も聞いており若干薄目ではあったが、十分おいしいといえるものばかりだ。これがフェイルの料理の腕前なのか、それとも食材の本来の味なのかはわからなかったが。

「それは差し上げますわよ。安価なものではないですが、娘の命を救ってくださった方々ですからそれくらいは」

フェイルが本心からそれを言っていることがうかがえた。

隠匿の美が日本人の特徴であるが、それを今持ち出すとかえって失礼かと思い、今は素直にいただくこととした。

「ありがとうございます。……それにしてもずいぶんお若いですね。まさかスフィさんがフェイルさんの子供だったとは」

話の話題を振る。

「あら、お世辞でもうれしいわ。ありがとうございます」

「アハハ……」

お世辞ではなく冗談を抜きにして若く見えるのだが、こういう時のうまい切り返しができない凜は愛想笑いが精いっぱいだ。

本来忍びであれば喜車の術や怒車の術といった、相手との会話の中で心理をつく術をつかえるべきなのだが、凜は口下手なのか、どうにもそういった会話の術が苦手で、もっぱら暗殺術や戦闘術を学ばばかりであった。

「ところでリンさんとミツフィーさんはずいぶんお若い旅人のよう
で」

今度はフェイルが話の話題を変えた。しかしその内容はあまり触れてほしくないものだ。

「え、ええまあ。まだ旅人としては未熟でして、まあそのおかげで偶然とはいえこうしてこの村には
行きつけたのですが」

適当に真と偽りを混ぜてごまかす。こういった場合は相手にとつてうれしいことを織り交ぜるのも一つの手法。凜は何とか使うことができた。

「まあ。ちなみにこの後はどちらへ？」

「ええつと……とりあえずはこの村にとどまろうかと。もちろんご迷惑でしたらすぐに出ていくつもりですが」

「迷惑だなんてとんでもない！ せっかく助けていただいた恩人ですのに。気が向くその時までいていただいて結構ですよ」

「ありがとうございます。しかしこの村にはいつもああいった獣が

現れるのですか？」

この話題は正直凛が聞いたかった内容の一つだ。
毎回毎回あんな獣が人里に出てこられては、村人のこころも休まらないだろう。

「いえ。ドドルは普段は温厚で人里には近づかないので、あのドドルが襲ってきたのは今回が初めてですわね」

ドドルとはどうやらあの青い熊のような獣のことらしい。

「『ドドルが襲ってきたのは』ということは、他の獣はあるんですか？」

「ええ」

若干フェイルの顔が曇った。

「その時はどうしているのですか？」

「以前はこの村には魔法と剣術両方に秀でたお方がいたのですが、最近になってどこかへ消えてしまって…」

魔法なんていう突飛な単語が出てきて、凛も顔にこそ出さなかったものの、かなり驚いた。しかし、異世界に来たということもあるし、何より一般人の目からすれば忍びの力も魔法もどっちも似たようなものに見えることは美冬のことをもって理解していた。

しかし、

「まほッ——」

慌てて肘で腹をつついて止める。何で止めたのか、不服そうに美冬は凛を睨んできたが、こればかりは止めなければまずい。

「ごめん。でも下手に口出して別世界から来たことがバレたらどうなるかわかんないし」

顔の向きは変えずに近づいて、美冬にしか聞こえない声でいった。
「ッ！ そそそ、そっか……こ、こっちこそ軽率でごめん」

ひどく動揺したそぶりを見せた美冬に、凛は訝しげに思ったが、フェイルもまた訝しげにこちらを見ていることもあって、すぐに話を続けた。

「他には対応手段は」

「お恥ずかしながら、今まではそのお方にすべてお任せしていたものでして。一人でも十分に間に合っていたものですから、今は誰も対応できないものでして」

「魔法……って使える人はいないんですか？」

魔法というが、やはり日本人からすればそれは若干陳腐な響きがあるわけで、魔法という単語を口に出すときに少しテレが入った。

「使えるには使えるのですが……そのほとんどが生活補助程度の効力です。かくいう私もせいぜい自衛程度しか使えません」

今の話からするに、魔法とは誰にでも使えるが熟達者になればその力は計り知れないものがある、と凜は推察した。一般人の生活補助ということはせいぜい火をつけたりといった程度のものだろう。逆に見たことではないが熟練の魔法使いが使えばその力は獣をも倒す力ということになる。

凜と美冬を見た人々の奇異の目の真意は、どうやら“服装”が変わっていたからというものと判断もできる。

「大変ですね……」

凜としては完全に他人事だったのだが、美冬がじろじろとこつちを向いている。

何が言いたいのかわからなかったのだが、我慢を切らした美冬が「私たちがいる間はそういう獣は何とかがします」勝手に口走った。

「本当ですか！？ 娘の命からこういったことまで……本当にありがとうございます！」

驚いて美冬を見れば、

「ごめん。でもこの人たちが放っておけないから」

謝りながら説明をした。この顔で困り顔をされると強くも言えない。

「代わりと言っては失礼ですけど、できればその間の部屋はお借りできませんか？」

せめてギブアンドテイクはしておきたい。こちらばかりが提供するのもフェイル側も申し訳が立たないだろうとも思ったからだ。

「構いませんよ。あいにくうちには使っていない空き部屋がたくさんありますから」

まったく想定内の返答が返ってきて、この場はお開きとなった。

美冬の思い

借りた部屋は十二畳ほどと比較的大きく、ベッドや棚、机や椅子など生活に困らない程度に家具が供えられていた。もちろん部屋は二つ借りた。

その夜、風呂にも入らず美冬はベッドに籠っていた。

風呂には入らなかったのではなく、入れなかったというのが正しい。風呂という習慣がないわけではないのだが、この村には水路というものがなく、入るためにはわざわざここから五キロ離れた湖に水を取りにいかねばいけないのだ。

なんだかんだで話が長引き、夜が遅くなってしまったので、仕方なくそこはあきらめた。

そしてそのベッドの中で美冬は未だに寝てはいなかった。

（ああ~~~~。なんでだろう、雅柴君が顔近づけるたびに心臓がドクドクなんだけど。今まで男子ではこんなことなかったのに）

美冬は容姿がいいし、そのことも自覚はしていた。もちろんナルシストというわけではなく、周りから見て自分はかわいいのか、と客観的になんとなくではあるが。

その容姿のおかげか、告白されることもたびたびあった。だが、本気で男という生物を好きになることは今まで生きてきて一度もなかった。顔が良かったりやさしかったりして、この人いいな、と少し思うこともないわけではないが、それが本気の好意ではないことはわかっていた。キスする程度に好きになることもあり、その時も胸が高鳴ることがあったが、それが男に対してではなく、ファーストキスに対してであることも自覚していた。

だから今回のように、近づくだけでドキドキというのは初めてで、

凜が好きなのではないかと先ほどから自問自答を幾度となく繰り返していたのだ。

（ん、でもこういった事態に陥ったのは雅柴君のせいだし、別に顔は悪くはないけどイケメン！って感じでもないし。でも性格はよさそうなんだよなあ。今日も森で……）

そこまで思い出して今日の凜の言葉がフラッシュバックされる。

「大丈夫。何があっても俺が何とかするから。もともと俺のせいであんなにちゃったんだし、絶対に風木さんが危険な目に合うようなことはしない。だから信じてほしい」

（のわわあああ！ なに思い出してんだッ！ それによく考えてみれば言ってる内容もそんなにかっこよくないし。……でもちよつと安心したのはほんとなんだよなあ）

いつまでも続く葛藤。

少しだけプラスに動いた凜への思いの真相がわかる日は来るのか。

004 真相、そして出会い（後書き）

くだらだらと駄文をながながと……もし読んでいる方がおりましたら申し訳ありません。

今回わかったことが一つ。

プロットもなしにぶつつけ本番はマジ自殺行為。

だいたいの話の流れとかはあるんですけど、別にPCに起こしているわけではないので、矛盾が大量発生することがあるかと思いません。

そのあたりは妥協、もしくは見限っていただいて結構です。

……嘘です。やっぱり見限らないで。

005 温かさは人の心を緩ませる

早朝。自然と瞼が上がった。

別に早朝の修行をするわけではなく、単純になれない寝具に起こされただけだ。

窓から見える歪んだ外の明るさは暗く、日の光もまったくないことから、地球で言うところの五時前に相当するだろうと判断できる。地球生物が活動できるこの世界は、かなり地球と酷似していることが分かった。

凜の目測では地平線の湾曲具合から距離までを見ると、地球と近い惑星の可能性がある。重力もかすかに軽い感覚はあるが、それでも普通の人間からすれば誤差の範疇に収まることを考えれば自転速度もそう変わりはないのだろう。息ができ、地球と同じ環境であることから大気の層もあることも推測できる。

そう考えると宇宙人というのは地球とは違う太陽系に存在する、太陽の距離も地球と同じぐらいの惑星で生まれし生物なのでは、と凜は妙に冷静に考えていた。

生物が生まれるということは水、タンパク質、脂質、炭水化物、核酸など、生物学的に最低限必要とされている構成成分等のほかに、地球生物の生存できる環境が必要となってくる。「そんなものができるのは天文学的数値」と中学の時、担当教師が言っていたのを凜はなんとなく思い出した。

さらに、違う惑星で遺伝子レベルでここまで人間と酷似している生物が生まれたことはそれこそ天文学的数値より低い。

それを考えれば、フェイルやスフィのような生物——人間と断定できないから——と出会えたことは非常に幸運だったといえる。

凜はそんなことを思いつつ、ハイカットシューズをはき、部屋の扉に寄って、扉に貼ってあった霊符を取った。部屋の中で靴を履く

習慣のない日本人にとっては室内で靴を履いている感覚は妙に新鮮だ。

破邪の札は悪霊、呪いなどから守る力があり、そこに凜のような特異の力を持った人間の気が交われれば、その効力は跳ね上がり、物体を通さないまでに至る。

目的としては単純に誰かを通さないというものだが、実際のところは少し違う。人間はものを食べているときと寝ているときに最も隙ができるとされており、食べているときはまだしも寝ているときに敵襲が来ても、凜は対処できるか不安であるから、こういった札などで用心をしているのだ。

廊下へ出ると、まだ暗いせいか廊下の暗がりが異様な不気味さを醸し出している。さらに気候は秋に近いこの世界の気温がいつそうそれを引き立たせた。

一度家全体を探知にかけてみれば、どうやら活動している人はいない。

玄関を出て、凜はまた村全体を探知した。動きがないことから、これもまた活動している者はいないと判断できる。

村から五キロ行ったところに湖があるのは前日のうちに聞いておいたので、そこへ向かう。足の経絡に気を集め、そこから一気に森の中へ踏み込んだ。方角は聞いてあったので、その通り村の南へと向かう。

木々の上を飛び移るような漫画のような方法も考えたが、木によっては折れる場合もあり、何より神経をより一層使うので面倒くさいからそれは頭の中で却下した。

全速力とは程遠いが、そこへは二分半ちよつとで到着した。

湖と言っていたその場所を見て、凜は度肝を抜かれた。透明度は南国の海のごとし高く、大きさは視界いっぱいに広がるそれが目に入れば、驚かないほうがおかしい。まだ暗く光もないが、例のごとく凜は忍びであり、夜目が聴く。その視力は真っ暗闇でさえ3・0にも及ぶ。

ゆっくりと近づいてしゃがみ、そつと触れてみれば、緩やかな波紋を広げて静かに消えていく。人体に影響がないのは昨日の晩に飲んでいるからわかつているのだが、今回触ってみて、そんなことはどうでもいいものだと思いが付いた。

久しぶりに心が和んだ気がした。

「あ、そうだった」

思い出したことをすぐさま実行すべく、湖から一〇メートルほど距離を取る。そしてその周辺にある土を動かした。自分のいる場所から徐々に徐々に土が沈んでいき、十秒と立たずにそこには半径三メートルほどのクレーターが出来上がる。周りは若干盛り上がった。

その後、気を手の経絡へと集中させ、それを具現化させた。手には大きな大きな火球があった。まん丸のサッカーボールほどの大きさで、その密度は高く、色は青色を超えて若干白。

それをクレーターへと放り、それを遠隔で弄りながらクレーター表面を溶かしていく。コロコロとクレーターの表面を転がし、ジュウジュウと焼ける音を発しながら土は溶け、赤くオレンジへとなっていく。火球が小さくなって消えたころ、茶色い部分が見えないそれはもはやマグマに見えた。

それから少し離れてちょうどクレーターと湖の midpoint に立ち、そこから湖に気を送り込む。物体は気を送り込むことによってある程度自由に操作することもできる。しかし、たとえ熟達した術者であっても生きているものに送り込んだところでわずかに動きを鈍らせる程度しか効果は得られない。ある程度の意思を持つ生物には、それぞれに違う気が発せられており、それが術者の気を妨害しているため、生きているものにその効果はないということだ。余談ではあるが死者であつたり、人形であるならば気を発していない以上効果が見られる。そのため、「死者操り」や「人形操り」は奇術史最大の禁忌とされている。

送り込まれた気はそこから熱を奪い、水を氷へと変えていった。

そしていびつな氷の塊となったそれを浮遊によって持ち上げて、クレーターへとぶち込む。

わざわざ氷にせずとも水を直接動かすことは可能だが、はっきりとした形を持たない水を操るのはこれまた神経を使い、わずかだが氷にしたほうが簡単だ。つまり凜が氷で動かしたのは、そのわずかに面倒だという直接水を動かす工程を凜が面倒くさがったただけだ。

クレーター表面へと触れた氷の塊は、ホットプレートに水をかけたような音とともに勢いよく溶け始め、すぐに蒸発して消え去った。残ったのはわずかな水と表面の冷めた土。

すさまじい熱気はまだ人間には厳しい。さらに湖の水を凍らせて、それをクレーターへと送り込む。先ほどよりも遅いペースで溶けていったそれは、

——温泉だ。

あとは温度調節として、水に触れて熱を移動させれば完成する。さっそくその工程を済ませて、温度を四十二度ほどにし、来ていた衣類すべてを脱いで、飛び込んだ。

水しぶきを上げて飛び込んだそれはまさに極楽だった。

サバイバルをした日には一週間入れない日があったりするその反動からか、それとも単にお風呂好きな日本人の性なのか、凜は風呂が好きだった。

「あゝ、極楽」

思わず出る声も腑抜けてしまう。緊張の糸が緩んだ隙に命を駆られる可能性をつぶすためにも、凜は一度だけ周辺五百メートルを探索しておいた。

一人だけで堂々と入れる温泉は、まるでその温泉が自分のものであるかのように感じられる。この土地が誰かの土地だった場合は早々に直しておく必要があるが、今ぐらいいはそんなことは忘れない。

見える木や湖がいつそうその極楽を高める。

“こんな贅沢あまりできないな”と凜は考え、次いで“誰かに教えたい”と思った。そんな時に浮かんできたのは美冬の顔だった。

あまり仲は良くなかった美冬。偶然見られてしまった故、巻き込んでしまった人間。

本当に申し訳が立たない。流れでついてきていたが、凜は美冬に対して少しだけ不思議に思ったことがあった。

凜は族長宅へと戻った。

まだ暗い。あと日の出まで十五分ほどだろうか。

急いで凜は美冬の部屋までいった。そこでノック。

「風木さん。起きてる？」

まだ五時過ぎに起きているわけがないとは思ったが、ダメもとで声をかける。

「なあゝにゝ」

扉の反対から声がかかった。ひどく眠そうで、今無理やり起こされたことに不快感を乗せた声。

「ごめん風木さん。ちょっと見せたいものがあって」

「ちよつとなの？ だったらあとじゃダメえ？」

「ちよー。ちよーみせたい」

「……むう。仕方ないなあ」

そういつて少し待つと、ゆっくりとドアが開いた。そこには昨日と変わらない制服と、昨日と変わった髪型の美冬がいた。髪はひどくボツサボサで、いつもクラスで人気のある少女とは若干離れている。

「……えッ！ 雅柴君ッ！」

寝起きであることをいまさら気が付いた美冬は大慌てで扉を閉めた。

閉められて、寝起きの女性を訪ねるのは少々デリカシーにかける行為だったことにいまさら気が付くが、今は時間が惜しい。

「ちよッ！ ごめん風木さん、急いでるから早くして。俺気にしてないから」

「私が気にするわッ！」

奥から怒声。素で謝意を表したのだが、完全に選択ミスだった。今のは凜が悪い。

渋々待っていれば、ゆつくりとまた扉があいた。そこには先ほどのようにぼさぼさの髪型ではなく、ある程度梳かれたきれいな黒髪となっていた。どうやらバッグの中に入っていた櫛で梳いたのだらう。

「あ、いやその……ごめん。ちょっとデリカシーに欠けてた」

「いや、こっちこそ大声で怒鳴っちゃって。それで見せたいものって」

言われて外を見れば、若干先ほどより明るい。

「ちよつとごめんッ！」

そういつて凜は美冬の肩と膝を背中から通して持ち上げた。ちよつとお姫様抱つこのように。

「ちよッ！ まッ！」

少し抵抗を見せたが、すぐに押し黙る。顔は真っ赤だったが凜は自分の目的でいっぱい、そのことにはまったく気が付かなかった。急いで玄関を出て、また先ほど通った道を通る。先ほどのよりちよつと速く走る。

急いでついた先には、

「あ……」

ギリギリのところ、間に合った。美冬を降ろす。

そこには先ほどの湖。しかしそれだけではない。方角的にその位置には太陽。

森の木々の上からひよつこり全身を見せて、それが透き通った湖に反射して、二つの太陽がそこにはあった。きらきらと輝く湖に、ギラギラと光る太陽が反射して眩しい。

だが、その景色は眩しくて、眩しすぎるくらいに綺麗だった。

この世界のこの位置ではちよつと南が太陽の顔を出す位置らしい。「す……こい……かも」

美冬の独り言に凧は何も言わない。

これはすごい綺麗かもしれないのではない。実際、すごい綺麗なのだ。

見れば価値ある景色。

写真に収めたく凧は携帯を探ってみれば、それはどこにもなかった。この世界ではほとんど使えないが、落としたことに後悔。

しばらくずっとこの風景を眺め、しっかりと、しかし確実に二人は目に焼き付けた。

「なにこれ？」

この風景に満足したのか美冬はきよろきよろと見回して、ちょうど目に入ったものを指さした。

「ああ、それさつき作った」

「これを？　へえ、すごいねえ」

指をさしたのは先ほど凧が作った温泉。

女はきれいを心掛きたい生き物。美冬のその目が入りたがっているのはすぐに検討が付いた。というより、温泉もまた見せたいうちの一つだったのだが。

「入りたい？」

「え？　いいの？」

言っている顔も声もすでに入る気が満々。

この反応はすでにわかりきっていることだったので、すでに水は取り替えてある。もちろん凧の使った水はいったん熱して殺菌を殺し、綺麗にしてから湖に戻した。

凧はすぐにぬるくなった湯を温めて、それからしばし考えた。

——仕切りがほしい。

そう思い、その仕切りを作ろうとして一瞬迷ったが、仕方なく作ることとした。

足の経絡を通して木へと気を打ち込み、そこから根っこや木々の枝を伸ばして、ちょうど湖だけ見えるように仕切りを作り上げた。

ぐちゃぐちゃで均等感は微塵もないが、しかし隙間もないしつかりとしたつくり。

作ることに抵抗があったというよりは、力を行使してる時を見られるのがあまり慣れていないから少し迷った。

「おおッ！」

その反応を見て凜は安心する。美冬に限ってこうつたことはもうないとは思ったが、こういった力を下手に見せて気味悪がられるのはさすがに傷つく。

案の定美冬は見られたことに気味悪がるそぶりは見せず、むしろそれが見たいといわんばかりの反応。

「じゃあ俺この仕切りの反対側にいるから」

「うん。……あ、のぞかないでよ？」

茶目っ気の乗った笑顔で言われて、凜は苦笑いで返してそのまま仕切りの裏へと歩く。

静寂の中、その入浴が終わるのを待つが、

——ズツ、ズル、サラサラ、スルスル。

聞こえてくる衣擦れの音が思春期男子にはどうにもいやらしく聞こえてしまう。

凜はできるだけそのことを考えないようにした。

——チャプン。

すこしして着水した音。その音が聞こえてまた意識してしまうが、なんとか無心を取り戻す。

「ねえ」

「はいッ！」

十五分したところに、美冬の声。

声が裏返ったらしい。いやらしいことを考えていると一発で見抜かれる。若干慌てたような声になったが、ぎりぎりだとどめた。

「タオルって持ってるの？」

美冬の質問の内容に硬直した。

先ほど凜が入った時は自分の一メートル前方に火球を作り、その奥から自分に風が来るようにして温風で乾かした。が、今回は他人乾かすことは

——アレ、無理じゃね？

焦りに焦って無言を貫く凜に、

「もしかして持っていないの？」と美冬の冷徹な声。

「どうやって乾かしたの？」

「じ、自分の力で」

「私はどうしたらいいの？」

「……じ、自分の力で」

「無理に決まってるでしょうがッ！」

怒声。

「いや、ホントごめん！ ちょっとフェイルさんに頼んで用意してもらうから！」

完全に失敗だった。目の前のことばかり見てそのわずかなことを見落とすとは完全に失態。まだまだ人間としても凜は未熟だった。慌てて取りに行こうと立ち上がったところで、

「待つて」

美冬の声。しかし先ほどのように怒った声ではない。静かに凜とした声。

「雅柴君のそれで……何とかできる？」

照れというよりは恥ずかしさのこもった声で問うてきた。

「できるけど」

しばしの間が開く。無言属性。

「タオルないからそれで何とかして」

ちよつと突き放すような、しかし恥ずかしげな声で美冬は頼んだ。

「……うん」

凜が一言そういうと、仕切りの奥からザバンと水の揺れる音がした。美冬が湯から出たことを確認して、緊張しながら力を使って温

泉の付近に火球を送り、美冬と火球の延長線上に風を作って送り出す。

「なんか簡易ドライヤーみたい」

仕切りの奥からそんな自然な感想が聞こえた。

しばらく力を使い、美冬の「もういいよ」という声を聞いて止めた。

二人の間を仕切りと微妙な空気が取り巻く中、凧は聞いてみたかったことをなんとなく口にしてみた。

「ねえ、なんであの時抵抗しなかったの？」

あの時とはもちろん凧と同じ罰を執行されることを知らされた時ののだが、あいにくわかりにくかったようで、美冬は「あの時って？」と聞き返してくる。

「風木さんも俺と同じ罰を受けるって聞いた時。混乱しててあんまり考えてなかったけど、普通だったら『なんで私がそんなことしなくちやいけないの』みたいなこと言って断るんじゃないかなって思ってた」

凧にはこれが引つかかっていた。凧の未熟さ故に勝手に巻き込まれた美冬からすれば、本来あそこで怒って逃げようとして当然だ。にもかかわらず美冬はうんうん頷いて、流れてここまで来た。

それが凧には考えられなくて、申し訳なかった。

「最初はね、そりやなんで私がーって思ったよ。でもね、そんな思いよりも雅柴君と一緒にいるほうがなんか面白いかなあーって思い始めてね」

「クラスでもあんまりしゃべったことないのに？」

「仲良くないからだよ。仲良くなければそれだけその人のこと知らないんだよ。」

それにそれ聞かされる前に小っちゃい女の子助けるところ見て「すごい」って思ったし、その真相が知りたかったっていうのもあるかな」

「でも危険だよ」

「わかってる」

「死んじゃうかもしれないよ」

「わかってる」

「……そっか。ほんとごめん」

どうしても謝りたい。もう何度か誤ってるけど何度でも謝りたい。何度誤っても誤り足りない。

凜は自分の勝手に他人を巻き込んでる自分が今までで一番憎く感じられた。

「もう謝らなくていいよ。もう割り切れてるし許してるし。まあ森からのスタートっていうのはきつかったけどね」

先ほどのまじめな声から一遍、からからと少し馬鹿にするような明るい声が仕切りの向こうから飛んできた。その声を聴いて、凜は心の中に引っかかっていた骨が取れて少し、すっきりした。

「ゴメン」

空を仰いで小さく聞こえない声で一つ、つぶやいてみた。水がこぼれないように。

「ありがとね」

慌てて目をこすり、不意に聞こえた声のほうを向けば、もうすでに着替えも済んだ美冬の姿があった。つぶやいた声や濡れた顔には気が付いていない様子だ。

「こっちこそ」

「なんのこと？」

「さてね。さ、帰ろう」

ちよつと、と追及してくる美冬に適当にのりくらりとかわして凜は誓う。

——俺、この人を死ぬまで守る。

そこにどんな思いが込められているのか。

好意なのか誠意なのか。

いつかは変わるかもしれないその思いを胸に抱いて凜は歩く。

005 温かさは人の心を緩ませる（後書き）

温泉作るためにバンバン力使ってます。

一応、そういった力は『五行』・『五遁』の力を応用したつてことに勝手にしてます。

五遁は本来、物理もしくは精神的に相手の行動を阻害する行為なので、漫画のように攻撃することは本来「○遁」とは言いません。某ジャンプ人気漫画のように。

そこへ行くと、某スクエニ系列のGの付く漫画雑誌に掲載されていたとある漫画は攻撃に「火生木剋」といった相剋と相生をちゃんと踏まえて書いてありますね。

本作はもちろん適当に書いてあり、忍者を都合よく作り変えています。

ついでに言えば、こういった力は本来忍術ではなく忍法と呼ばれています。

006 魔法という存在の大きさからくる決意

族長宅へと戻ると、そろそろ村の皆は活動を始めべく起床しているものが多かった。

「ただいま戻りました」

そう声をかけた先は台所。そこではせわしなくフェイルが動いていた。

「あら。お部屋にいないからどこへ行ったのかと思ったわ」

「すいません。ちよつと昨日話題に上った湖というのが見たくて」

「どうでした？」

「すぐく水も透き通って綺麗でした。それでその……」

温泉を勝手に作った、などと言っているのか凜が迷っていると、美冬が、

「温泉作っちゃいました！」

なんて茶目っ気ある声で暴露した。

美冬は先に部屋へ戻しておくべきだ、と凜はいまさら公開した。

「オンセン……とは？」

そういうフェイルは器用に料理をこなしながらこちらに顔を向けて会話をする。その顔は怪訝。

聞いたことがないような反応を見せることから、温泉という風習がこの世界、もしくはこの民族にはないものだと判断できる。

「なんていうんでしょうかね。外で入るお風呂、湯あみ場みたいなものですかね」

言いくいので遠まわしに言おうと考えていたのだが、見事に美冬が暴露したせいで、オブラートに包むことなくいう羽目となった。正直諦観の念が強い。

しかし、フェイルの反応は思ったよりも良かった。

「まあ！ そのようなものを？」

凜はてつきり勝手に作ったことを怒られるとばかり思っていたのだが、フェイルの反応は怒りというより驚きだ。

「ええ、やっぱり勝手に作っちゃまずかったですかね？」

「そうですね……特に問題はありませんよ？ さすがに浸かった水をまた湖に戻されると困るのですが」

問題ない発言に、今度は凜が驚く番だった。

まさかそこであっさりよしとされるとは思わなかった。怒らなかつたにしろ、今後は使わないようにとか、埋めておくようにとか言われるかとばかり思っていた。

浸かった水は一度熱をかけてきれいにしているため、ある程度は問題ないかと思うが、やはり生活用水である以上は今後もし使うのであれば、完全に蒸発させて湖には戻さないほうがいいかもしれない。

水位が湖の淵ギリギリまであったことを考えると、一応水底から湧き上がっているのかもしれない。

凜達はフェイルの寛容さに感謝して礼を言いつつ、一度部屋へと戻った。

十二畳ほどと広い部屋で一つ思うことがあった。

——着替えどうしようか。

地球では普通に毎日着替えをしていた以上、ここでも着替えをしたいのだが、ここはフェイルとスフィの女二人。服に関しては小さかるうが着ることはできるが、特に下着は困る。ノーパンというのはたとえ男であつても抵抗感是否めない。

それにこれに関しては美冬も困っているのではないのだろうかとも思う。身だしなみに特に気を使う女性であればなおのことだ。

せめて一着でも替えがあればと凜が悩んでいると、扉をノックする音が聞こえた。どうぞ、と許可をして、入ってきたのはスフィ。

何かを抱きかかえており、その何かが凜からは布に見える。

「あのリンさんに着替えを……」

「えッ！ ほんと？」

思わず素で声が出てくる。こういったことを目から鱗というのだろうか、と凜は思った。

「ええ」

しかし気になることが一つ。

「聞くのは野暮かもしれませんが、どうして男物が？」

女所帯であれば、男物があるのはおかしい。

森のような閉鎖された空間であれば来客も少ないだろうし、特に客用というわけでもない。

「昨日お話になった男性の方のものです」

スフィは懐かしそうに言う。

男性の方というのは魔法と剣術ともに優れたとフェイルの言っていた人だろう。

「その方がここで暮らしていたものですから」

「その人ってそんなすごいんですか？」

凜は聞いてみたくなった。本当はこれこそ野暮なのだろうが、好奇心が勝る。

「すごかったですよ。とつても強くて、優しくて……」

少しうつむいて話すスフィからは、懐かしさの間にさびしさが見え隠れしているように見える。それを見て凜はまたしまったと思う。その男性というのはもうここにはおらず、なのにそんな人を無理に思い出させてしまった。本当にデリカシーにかける。

「すいません。なんか無理に思い出させてしまったみたいで」

「いえ。こちらこそ憂鬱に話してしまって……それじゃあ着替えここに置いておきますね」

言ってスフィはテーブルに着替えを置いて、そそくさと出ていた。「ほんと俺はデリカシーにかける……」

むなしくつぶやく声は虚空へと消えていった。

凜は気持ちを切り替えるべく着替えることにし、着替えを持ち上げてみれば、それは麻でできた白いワイシャツと青く染められた簡素なズボン、そしてしろいトランクス型のようなパンツだった。

服に関してはさほど地球と変わらないため、特に違和感を感じなかったが、下着に関しては違和感を感じずにはいられない。確かに見た目は白いトランクスののだが、それはあくまで形の話であって、実感とは大きくかけ離れている。はいてみればごわごわとしていて、今までのペラペラとした薄い感じと違うところから違和感を感じ、そしてゴムではなくひもで縛る体をなしているところもまた違和感を感じた。

ただ、今の現状からして着替えがもらえたことそのものがラッキーなものだ。

慣れるのには時間がかかりそうだが、文句は言えまいと凜は割り切った。

下着を持って歩くのは気が引けたため、凜は部屋へと置いてスフイかフェイルを探した。しかし思ったよりここは広く、一人一人を探すだけで思ったより時間を食う。

面倒なので探知をかけて探せば、三人の人間の反応。一人は凜の部屋の隣の部屋であることから、美冬だとすぐに検討が付く。もう二人は台所にいたようで、すぐにスフイとフェイルだということはわかった。そこへ足を進めた。

「お二方、洗濯場の位置を教えてくださいなのですが」

「それなら家の裏にありますわ」

言えば料理中の二人は一緒に振り返り、答えたのはフェイルだった。

それに礼を言って凜はそこへと向かおうとして、

「お似合いですよ」

笑顔でスフイに言われてまた礼を言う。下のほうがいまいちマツチしてないことはもちろん見えないので黙っておく。

玄関から裏庭へとまわり、雑草の生えた場所へと出た。そのちようど草が生えていない一角にあったのは井戸で、その横にはその水を汲みとるための木製桶が二つ付いた滑車の原理を利用する装置

と、さらに横には水をあける平たい木製のタライ。井戸を使用したことのある凧にとってはこの程度お手の物で、すぐに井戸の縄を引っ張って桶を取り上げ、反対につるされた桶を下していく。上がったくる桶をあける用の桶に汲んだ水を入れてそこで、

「あ、パンツ忘れた」

慌てて取りに行き、部屋へと向かえばもじもじと凧の借りている部屋の扉の前で立っている美冬の姿。服装は制服ではなく、白い麻でできたワンピースのような衣類を身にまとっている。

おそらく凧に着替えを渡す前に、スフィが渡したのだろう。

白の衣類が美冬の黒い髪を一層引き立たせ、素材が良いのか非常に似合っていた。

それに美冬であればおそらくどんな服装でも似合う気が凧にはした。

「どうしたの？」

「ひゃッ、み、ミヤヒハフン」

何の気なしに声をかけたのだが、美冬は驚いて声を上げ、そして見事に噛んだ。

「ど、どうかなあ？」

顔を真っ赤に染め上げて、美冬はワンピースのスカート裾を軽くつまんで持ち上げた。よほど恥ずかしいのだろうかと思えた。

どうとは似合っているかどうかなのだろうが、口下手なうえにヘタレな凧はどうしたものかと迷い、

「似合ってるよ」

結局、困ったときの常套句でごまかした。

「あはは……ありがとう」

「いえいえ。で、風木さんは……なんでもないや。ちょっとどいてくれる？」

着替えに違和感ない？　ときこうとしたのだが、これもまたデリカシーにかける発言だときりぎりで気が付いた凧はすぐさま話をずらす。

了承を得てどいてもらい、中へと入って下着とワイシャツ、赤い文字がでかかとプリントされたＴシャツを手にとって、洗い場へと戻った。

戻って水を張ったタライに洗うものをすべて入れ、それから……なんとなくあたりを見回して、ちょうど目に入ったバケツを手にとった。中には透明な液体が入っており、それを指先で触ってこすってみると、何やら泡が立ってきた。においは少しミントの香りがある。

凜はこれを洗剤だと判断し、それを少しタライに入れて軽くこすって洗った。

洗い終わったものはすべて宙に浮かせて、強風を起こしてある程度乾かし、あとは部屋へ持って帰って自分で乾かすことにした。物干しざおもあったがあまり大きくないものであり、フェイルとスフイも使うだろうからと思ってそこは遠慮をした。

家の中へと戻ると、朝食ができたようで、エントランスの位置からでも香ばしい良い香りがした。

香りにつられて台所へ行けば、もうすでに盛り付けが終わり、これからワゴンに乗せて持っていくところ。

「もう持っていくますので」

スフィの一言を聞いて、一つうなずくといったん部屋へと戻り、洗濯物を乾かすことに。

物干しざおが欲しい。どうしたものかと迷って部屋を歩き回っていると、ミシリ、と床がきしむ音がした。それを聞いて、必要悪と割り切って床に手を置く。手をゆっくり引き上げれば、そこからは長さ二メートルほどの棒が手のひらに引っついて床から延び出てきた。たくさんある家の木材をいろいろな場所から少しだけ、本当に少しずつもらって棒を作り上げたのだ。

「すいません」

誰もいない部屋で一言謝ると、それを壁の角の出っ張りにひっかけて、そこへ洗濯物をかけた。

そして目的の場所へ。

そこは十畳ほどの空間で、相変わらず飾り気は感じられないが、その真ん中にはテーブルクロスの駆けられた大きなテーブルが一つと、その横に五つのイスがあった。昨日の夕食にも使った場所である。

その五つのうちの一つにすでに美冬は座っていた。若干顔がまだ赤みを帯びているのは気のせいだと凜は勝手に思った。

スフィとフェイルはテーブルへと盛りつけられた皿をワゴンから移している。

「手伝いましょうか」

「いえ、お客様に手をかけさせるわけには」

善意の気持ちで言ってみれば、そう返された。何を言っても手伝わしてくれそうにないことは明白だったので、凜は仕方なくイスへと腰かけた。

凜がしばらく待っている間に支度は終わり、全員が席について料理を頂くことに。

「いただきます」

「いただきますッ」

「あの……」

いつも通りのあいさつに、何か疑問点があったのかスフィが声をかけてきた。

「そのイタダキマスという言葉はなんなのでしょうか？　昨日も言っておられましたけど」

「なにつて……俺たちの生まれの国での習慣なんですけど、食べ物を頂くときに、食べ物とそれを作ってくれた人に感謝の意を込めてというものです」

凜は説明に困ったが何とか正しい意味で言えた。

「へえ、初めて聞きました。私もやってみていいですか？」

「え？　構いませんけど」

それをやるなという権利など凜にはない。

「い、イタダキマス」

少しテレが抜けない様子でスフィは口に出すと、自分のスープを飲み始めた。

食後、凜は美冬の部屋へと訪れて、雑談を始めた。

凜は備え付けのイスに腰掛け、美冬はベッドの淵に腰掛けて、向かい合うように座る。

「それにしても魔法……ねえ。雅柴君を見た後だから信じられるけど」

その単語は昨日フェイルと話した時に出的ものだ。その時夕飯を食べた時のことなのだが、明かりを作るときにフェイルが手から光球を作り出したのだ。その時の美冬の反応は驚きをもろに見せかけたため、ぎりぎりで凜が小突いて止めたが。

「確かに俺も驚いたけど、言われて納得した部分もあった」

「そんな場所あった？」

「うん。ここミリフィ族ってさ、なんか男も女も体つきが細く見えなかった？」

「うゝん……言われてみればそうだけど、気になるほどでもなかったかな」

考えるそぶりを見せて美冬はそう返す。

「魔法による生活補助は多くのものにできるってことは、生活の時に力を使う仕事がある程度魔法に頼ることもできるって考えられるでしょ？ 魔法については俺みたいなものなのか、それとも漫画やゲームに出てくるものなのかまではわからないけど、少なくとも力を使うときに楽しんでいるのであれば、少しずつ使わない力が出てきて地球人より弱体化している可能性もあるし」

確かにここにいる人間は若干地球人に比べて体つきが細かった。

魔法に関しての知識がまったくない凜たちには推測でしかものと言えないが、可能性の一つとして考えられる。力を使わない分太るという考え方もできるが、少なくとも農業などが必要な分は歩いた

りしなければいけない以上、目に見えて肥えることもない。

ほとんど凜の洞察力によって偶然わかったことなので、実際はそれこそ誤差の範囲で収まるようなものだが、

それに、魔法というものはこの世界に広がっているものだろうし、これはミリフィ族に言えたことではない。

「ほくなるほど。でも魔法ってどんなものなんだろう？」

今度は魔法そのものの話に移った。

「魔法って聞くと、魔力によって魔法を発動するものを連想するんだけど」

「まあそれであつてと思うよ。フェイルさんの口ぶりからすると、魔法は攻撃の手段にもなるみたいだし、そういった点は俺たち知ってる魔法の定義から大幅にはずれたりはしてないと思う。気とは違うけどどフェイルさんが光球作つた時に変な力感じたし」

凜はそこまで言つて止める。

「それって奇術とは違うのかな？」

「どうだろう。奇術はもともと気を使う術だし、それに本来は自然を利用する術だったみたいだし」

「と、言いますと？」

「たとえば木を操つて進路を妨害したり、体の熱を何倍にも増幅させて具現化して炎を作つて火壁で妨害したり、土をいじつて相手を拘束しているうちに逃げたり」

「なんか逃げる術ばっかだね」

「そりゃね。忍びの遁術は逃げるための術だから、おのずとこついた形になるんだよ」

なるほどといった様子でうなずくと、うしろに倒れてベッドにおむけになった。

「ほんとに異世界なんだねエ」

わかりきつたことを美冬は言つた。

「そつだろうね。昨日の夜ちよろつとこの家にあつた本を見せてもらったけどさ、文字がわけわかんない。まるで古代文字」

昨日、魔法について知りたくて、凜は魔法について知りたい旨を伏せて、フェイルに頼んで何冊か本を見せてもらった。しかし、まったく言っていないほど文字の形から文体までが違っている。せめてアルファベットでも使われていれば覚えられないこともなかったかもしれないが、まったく違う惑星で生まれた以上、そんな偶然はありえないし、この星に人間が生まれていただけでも奇跡なものだ。結局魔法については1つも情報を得られなかった。

「なんか不思議」。言葉は通じるのに文字が読めないなんて」
美冬の意見には凜も同意だ。

これではまるで、相手の話している英語はわかる上に、その言葉を自分もしゃべれるにもかかわらず、それを文にしたら読めないようなものだ。

「まあ、言葉が通じるだけでマシだよ」

「そうだね」

「あ、そうだ。これからこの村についていろいろ聞いてこない？」

凜は思いついて言った。

今後この村で生活していく以上、この村のルールなどは知っておいて損はないだろう。

「そうだね。紹介してもらったほうが居心地もいいし」

これから村を回ることが決まり、二人はスフィのもとへと訪れた。

「村の案内ですか？」

「ええ」

ところ変わって裏庭。どうやら洗濯をしていたようで、せこせこ服を洗っていた。

「構いませんよ。私もそうしたほうがこの村で生活しやすいと思いますから」

凜達はスフィの洗濯が終わるのを待つて、終わり次第案内をしてもらった。

ゆっくりとしたペースで歩き始めて最初に向かったのは、村の中

心。

中心は縦と横の大きな道が交差しているちょうどその交差点で、そこから道に沿って見ていくと族長宅、森、森、畑が道の先に見えるた。

つまり、この村は大きな空間をおおきな十字道で区切って、その分割された四つに村人は生活しているということだ。上空から見て、上へとつながる道が族長宅、右が畑、下と左が森へとつながっており、下の道をたどって森の中にある道を行けばこの森から出られ、左へと行くと、凧の今日見た湖がある。

そして、その区切った左上と右上には家々が立ち並び、左下と右下にはそれぞれ工場と畜産場があった。工場は塩を生成したり、服を作ったりするための場所であって、誰かがそれでも受けているわけではない。代わりに、そういったものを一手に引き受けて、あとで物々交換をするという、お金の概念ができる以前の地球のような生活をしていた。

おそらく農業は誰が、畜産業は誰が、工業は誰が、と分担をしているのだろう。こういったことは今も昔も別の場所でも変わらないらしい。

凧たちは一通りの説明を受け、それぞれの住民にあいさつに回った。昨日は奇異の視線を向けていた人々も、服装の違った凧たちを比較的すんなり受けれてくれた。昨日のアレはどうやら服装が原因だったのか。

余談だが、森で閉鎖されている以上外部とのつながりは数えるほどしかなく、そういった閉鎖された暮らしをしてきた所為のか、ここにクラスひとびとからは奥ゆかしさ感じられた。まるで日本人のような。

日本も昔は比較的閉鎖した国であつたし、それ以前も中国という大国の腰ぎんちゃくのような存在だったせいだろうか、あまり堂々とせずに表だつてつけつけとしない。

そしてミリフィ族も百弱という数であるが故に、大きな獣への対

抗力も弱く、もしどこかの軍に責められたならばすぐにつぶれてしまう。

そんな閉鎖的、弱者という点で日本人とミリフィ族には共通点があり、奥ゆかしい感じが、日本人である凜はシンパシーを感じた。
「みんないい人達ですよ」

一通りのあいさつの終わった後、家へ戻ったスフィからそんな言葉を笑顔でもらった。

「最初は変な目で見られていたから大丈夫かなと思っていただけ、意外とすんなり受け入れてくれて助かりました」

たぶんこういった小さな集落で、閉鎖された空間ある以上、お互いがお互いを助け合っていかなければ生きていけないのだろう。それは仕事を分担していることから理解していた。

「今日はありがとうございます。おかげでこれから暮らしやすくなりそうです」

「いえいえ。命の恩人にこれくらいはして当然です。それにこちらも楽しかったので」

では、といってスフィは昼の支度をしに台所へと向かった。

「俺たちももどろっか」

「そだね」

凜は昼食を食べ終わると気分転換がてら散歩をし、夕食を食べて自分の部屋へと戻った。

「魔法……か」

思わず口からこぼれ出た。

実際のところ凜は村案内をもらった時、別の目的があった。村案内を頼んだのはその目的のためだ。そしてそれが魔法について歩いている最中に魔法を行使しているところが見られれば、と思って歩いていた。結果二、三度そのシーンを見ることができた。偶然挨拶に行った家で魔法がつかわれており、そのシーンと言えば、焚き木に火をつけるというもの。

これは凜でもできる。が、目的はそこではなく、そこから感じられる感覚だ。

凜の使う奇術とは違い、内部というより外部からの力を使っているような感覚を受けた。その力が体内へと流れ込み、そして具現化した力へと変わって目に見える。

仕組みは違うが確かにこれは戦闘にも応用できるものだ。炎を出す出力を上げれば火球にもなるし、何もない場所で水を作り上げることもできるかもしれない。

空気中の水素と酸素を反応させてならば凜は水を作れるが、しょせん空気から得られる量はたかが知れている。それに対して魔法であれば、その術さえ知^{すべ}つていれば、誰でもあとは取り込む外部からの力によって大量の水が作れるかもしれない。

誰でも使える。

それは奇術にも言える。人間にはすべて気があり、それを使いこなせるようになれば誰でも使える。

だが奇術と魔法を比べれば、不利なのは奇術だと凜は思った。

奇術で言うところの気を、魔法は何を使っているのかわからないが、外部から取り込んだということは、その力はそこらじゅうにあるものであり、底をつくことを知らない。つまり下手をしたら限度がないということになる。

その点奇術、人間の体内に内包された気には限度があり、それが底を尽きればまったく力をつかえない。

そう思うと凜はなんとなく自信がなくなるのだった。

これからもし魔法使いとかち合うことになったら勝てるのかどうか。

そんな敵と戦うことになって、本当に美冬を守れるのか。

特に二番目に関しては人命がかかわっている。その分だけ怖い。

もし自分の力不足で美冬が死ぬようなことがあったらと思うと、怖くてたまらない。

地球では奇術なんてものは門外不出の力であつたがゆえに、力比

べで負けることはないという自覚があったし、一般人から命の危険にさらされることもないと思っていた。

だけど今、こうして地球とは違う世界に来てみてどうか。

魔法という漫画やゲームのような力が普通にまかり通っている世界。自分と同じ、もしくはそれ以上の力を持った人間がいるかもしれない。

もしかしたら自分の力にうぬぼれていたのかもしれない。嫌々だったけど手に入れた力は普通とは違うし、どこかでそのことを理由に心因的にまわりより優位に立っていたのかもしれない。

そんな自分に凜は嫌気がさす。

いざ自分より強い力があるという現実にぶつかった途端に力というアイデンティティが瓦解して、ぼろぼろに崩れ去って。

本当に自分は美冬を守れるのか。本当に自分は美冬に命を懸けるのか。

そう思うと自信がどんどんなくなっていく。

「ハア」

思わずため息がこぼれ出た。そのため息にまたイラつく。

自分の力にうぬぼれて、未知の力にぶつかって、それが不安で……。

その不安が消したければどうにかするしかない。その自信を取り戻すのならどうにかするしかない。

——どうにかってどうやる？

そこまでかんがえて一つ思い出す。

——また修行を始めようか。

凜は中学まで続けていた毎日の修行を高校に入っただと同時にやめた。それは単純に面倒くさいというもので、それまで毎日通っていた仁蔵宅にもいかなかった。それから仁蔵からの連絡で「せめて週一回ぐらいは顔出せ」というほとんど命令に近い言葉を理由にしかたなく週に一度だけ通い始めて。

それでも一応毎日無心になることだけは続けていたが、それ以外

は週一の手合せのみ。

これから始めるとなれば、自分でできる範囲として基礎体力の向上と術の効力拡大。

——明日からは早起きだな。

朝の苦手な凜からすれば、あまりうれしくない事態だが、それでも不安と自身のためには避けては通れない道。

その不安と自信という壁を壊す日はいつになるのか。

美冬の末練

自室にて。

（そういえば学校ってどうなってるのかなあ。マンガみたいにこつちでの一日が地球での一分みたいだったら問題ない…… っであるじゃん！ 私がもしここで十年過ごす羽目になったら戻った時何歳だよってなるじゃん！ うわっどうしよできるだけ早く帰りたくなってきた。

うーん。いつそのことこつちに永住しちゃうかなあ。でもお母さんとか心配するだらうし。

しょうがないで割り切れることでもないし、行方不明とかになつてたらマジやばい……。

でも雅柴君のお爺さんがこの世界に認められることが元の世界に帰る唯一の方法だつて言ってたし、それができれば…… ってそれ無理じゃーん！

だって全然意味わかんないもん！

あゝ、もう本格的にこつちに永住しようかな？ お母さんたちには悪いけど。

でもこのパディントンバッグももつたいないなー。友達にも見せるって約束してたのに結局約束守れなかった。まあ私の自慢みたいなものだからそれはまあいいけどさ。

でも友達には会いたいかも……。

雅柴君だけっていうのも……。まあやさしいし、それなりに勇敢だし、退屈はしないけど。

とにかくふたりじゃ恥ずかしすぎる！ 今日このワンピース『似合ってるよ』って！

キャーーーーー！

なんなんだーこの気持ち。恥ずかしいどころにかならないかな。

あー二人でいるときとか間が持たないっていうか妙に緊張してさ、あー今まではただのクラスメイトだったのに……。『

それにこの世界に永住しか選択肢がなくなったら……。け、け、け、け結婚とかって。』

み、雅柴君とになるのかな。いや待て待て待て待て……！！焦るな。話が体操選手並みに飛躍してる。落ち着け。

それはこっちに永住したらの話だし、雅柴君の気持ちもあるし、なにより私だってこれからこっちに好きな人ができるかもしれないし。

そうだ！ まだわからないんだ！

……。でも、ちよつと雅柴君がほかの女の人に取られたらいやって思ったかも。

あー！ 情けない！ 嫉妬なんてどんだけ醜いんだー私イ！

もういい！ どうせそんなことすぐには決まることでもないし、成行きに任せる！（

006 魔法という存在の大きさからくる決意（後書き）

話があまり進んでませんね。

すいません。

次あたりに話が進む……かもしれません。

あと一応書いておくと、この話での奇術とは自然もしくは自分の体に気の力を作用させることによって効果を得るものということにしています。中二（笑）

またいつか本文にこの説明乗せるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1563q/>

忍びの忍ぶ道

2011年1月19日18時55分発行